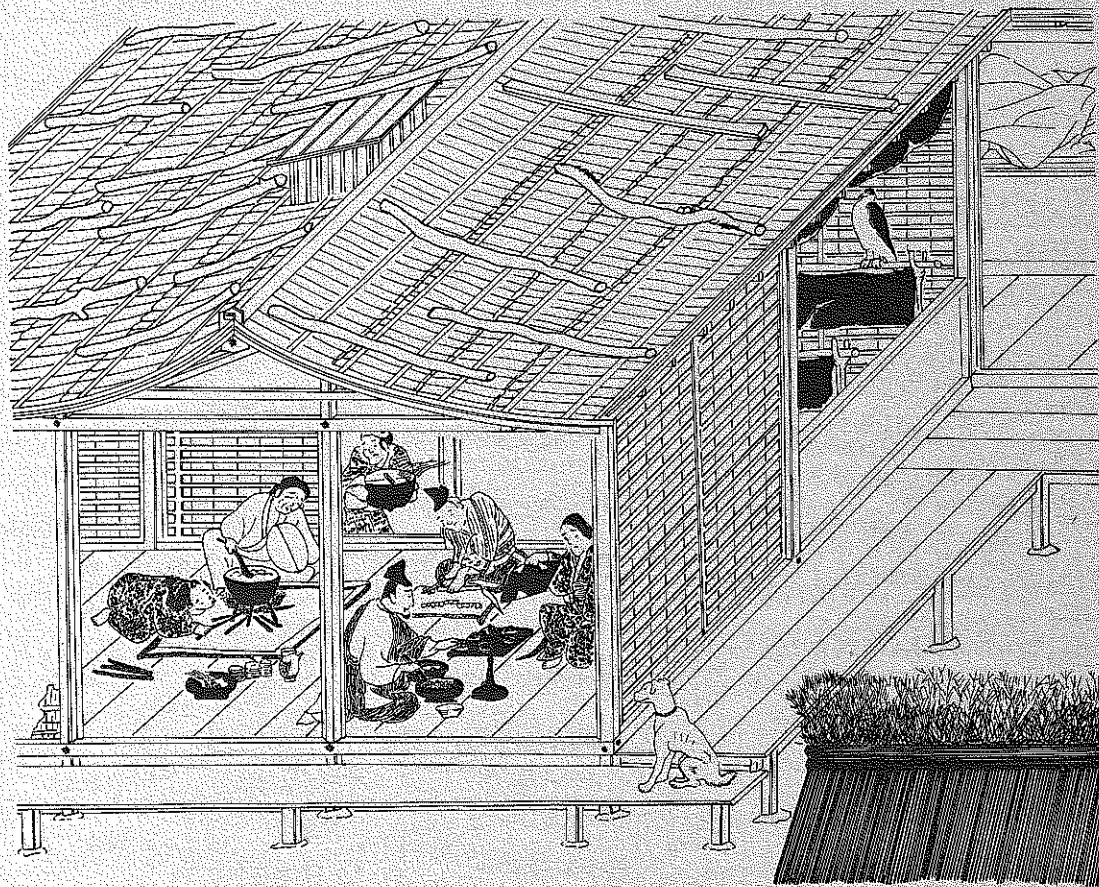


西浦遺跡発掘調査概報

(木幡西浦27 - 1 番地)



(「春日権現験記絵」より)

1994

宇治市教育委員会

西浦遺跡発掘調査概報

(木幡西浦27 - 1 番地)

1994

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では宅地開発を始めとする開発が相次ぎ、それに伴い実施する埋蔵文化財の発掘調査が増加をしております。

本書は、宇治市教育委員会が平成6年度に実施しました西浦遺跡の発掘調査成果を一冊にまとめたものであります。

発掘調査成果の具体的内容は後述するとおりですが、今回の調査では鎌倉期から室町期にかけての遺構・遺物が良好な状態で検出されました。中世木幡の歴史を考える上で貴重な資料であると思っています。

本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史解明の一助となり文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、発掘調査の実施について御理解・御協力いただきました方々を始め、調査期間中や整理期間中に御指導賜りました関係各位にたいして心よりお礼を申し上げます。

平成7年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩 本 昭 造

例 言

- 1、本書は、平成6年度西浦遺跡発掘調査事業の成果概要である。
- 2、本書は、宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第30集にあたる。
- 3、本書で使用する方位はすべて磁北である。
- 4、本書が収録する発掘関係資料は宇治市教育委員会が保管・管理している。
- 5、本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課文化財保護係が行い、実務は浜中邦弘が担当した。
- 6、本書の執筆分担は、下記のとおりである。
I・II・III・IV・V（瓦）・VI……………浜中邦弘
V……………時実奈歩（花園大学学生）

本文目次

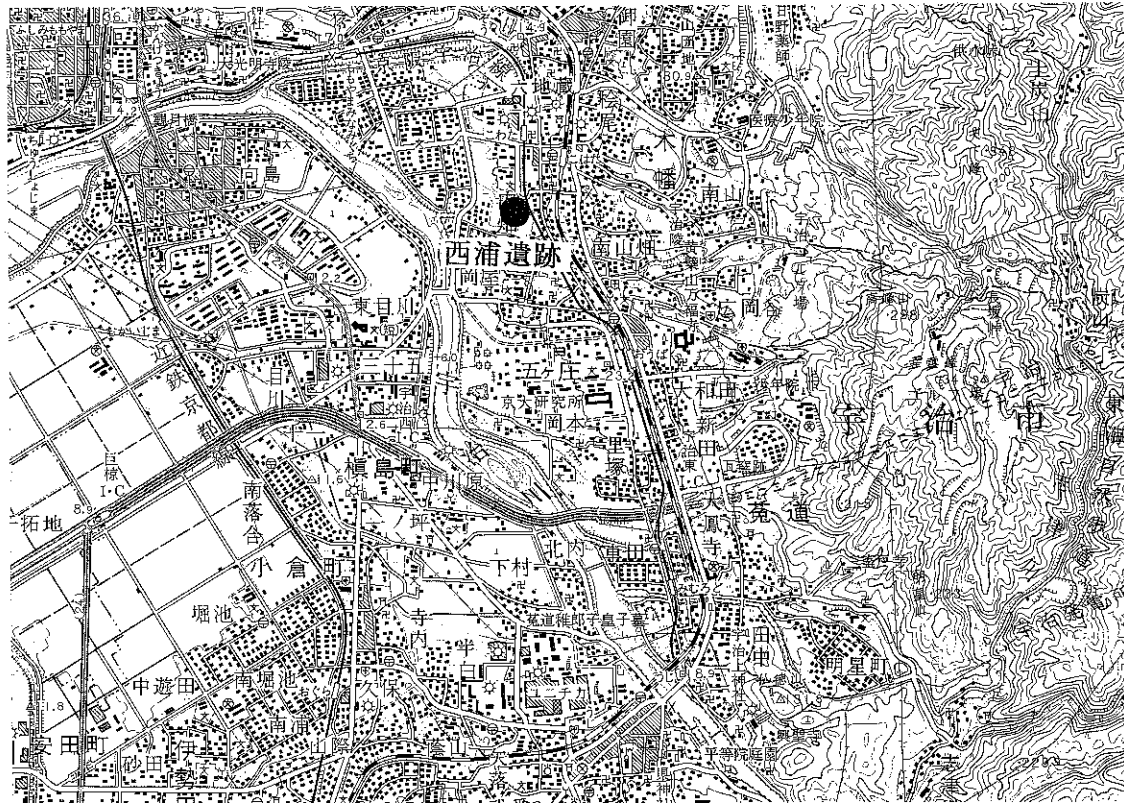
I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	過去の調査と調査の経過	4
	A. 過去の調査	4
	B. 調査の経過	4
	C. 発掘調査体制	6
IV	検出遺構	7
	A. 1トレンチ	7
	B. 4トレンチ	12
V	出土遺物	17
	A. 1トレンチ	17
	B. 2トレンチ	27
	C. 3トレンチ	27
	D. 4トレンチ	28
	E. 1トレンチ東グリット	28
VI	まとめ	34
	註	37
	抄録	38

I はじめに

ここに報告をするのは、宇治市木幡西浦27-1番地他において実施した西浦遺跡発掘調査の成果概要である。

西浦遺跡は宇治市東部北端、木幡池と旧奈良街道に挟まれた南北に細長い平地部に展開する遺跡で、現在の木幡の町並の南端に位置する。西浦遺跡が所在する木幡は、古くは『日本書紀』・『古事記』や『万葉集』に「許国」として記載される著名な地域で、平安時代には藤原基経から始まる藤原氏歴代の墳墓群を始めとして、藤原氏の寺院・別業が築造される等、宇治川河口東岸の平等院一带とともに藤原氏と縁の深い地域といえる。しかしながら、藤原氏墳墓群は現在宇治陵として宮内庁が管理しておりその実態が分からず、また発掘調査においても道長創建の浄妙寺以外にはほとんど調査がないこと等があって、木幡は歴史的に重要な地域にもかかわらずこれまであまり注目されることがなかったといえる。

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査であり、開発事業者よりの受託事業として本市教育委員会が実施した。調査期間は平成6年3月16日から同年6月30日までで、調査面積は約1,170㎡である。



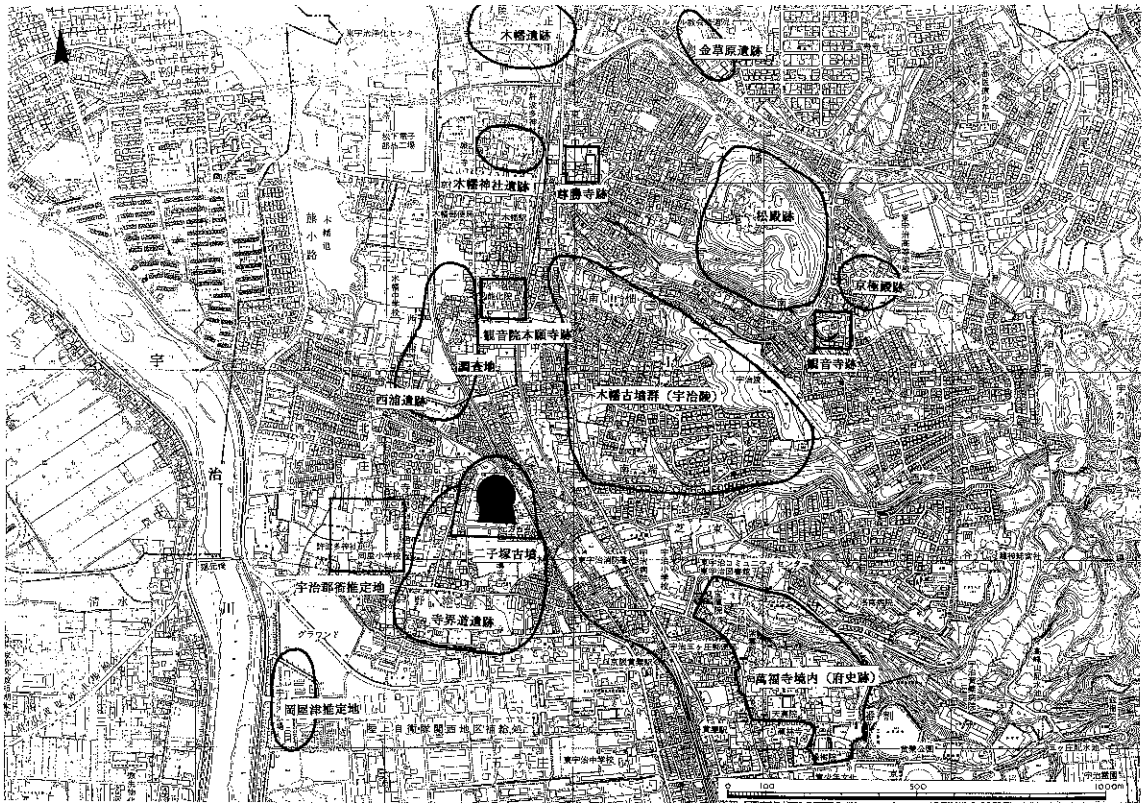
第1図 西浦遺跡の位置 (1:2,500)

Ⅱ 位置と環境

A 地理的環境

西浦遺跡は、宇治市東部北端、木幡池と旧奈良街道に挟まれた細長い平地部に位置し、現在の木幡中心部の南端に位置する。

本遺跡東側には、調査地に向かって緩傾斜する丘陵が奈良街道付近にまで続く。西側は、織豊期、時の関白豊臣秀吉によって宇治川の付け替えが行われ、現在はそれ以前の景観を伺い知ることはできないが、付け替え前は、巨椋池の岸辺が調査地付近にきていたと想定されている。このことから、調査地の位置する細長い平地部はさらに狭かったといえる。西浦遺跡の西側一帯に広がる木幡池は、巨椋池東北端部の残存と考えられているが、直接の成因は宇治川堤背の湿地に山科川などが流入してできたものらしい。現在、遺跡の南には弥陀次郎川が流れているが、近世初期までは調査地の南微高地にある二子塚古墳のさらに南を流れ、隠元橋付近で宇治川と合流していたことが、『五ヶ庄絵図』（陽明文庫蔵）等から窺うことができる。近世以降、この周辺の土地利用は、大半が茶畑として利用され、特に「西浦」は優良な茶園としてつとに有名であったようである。



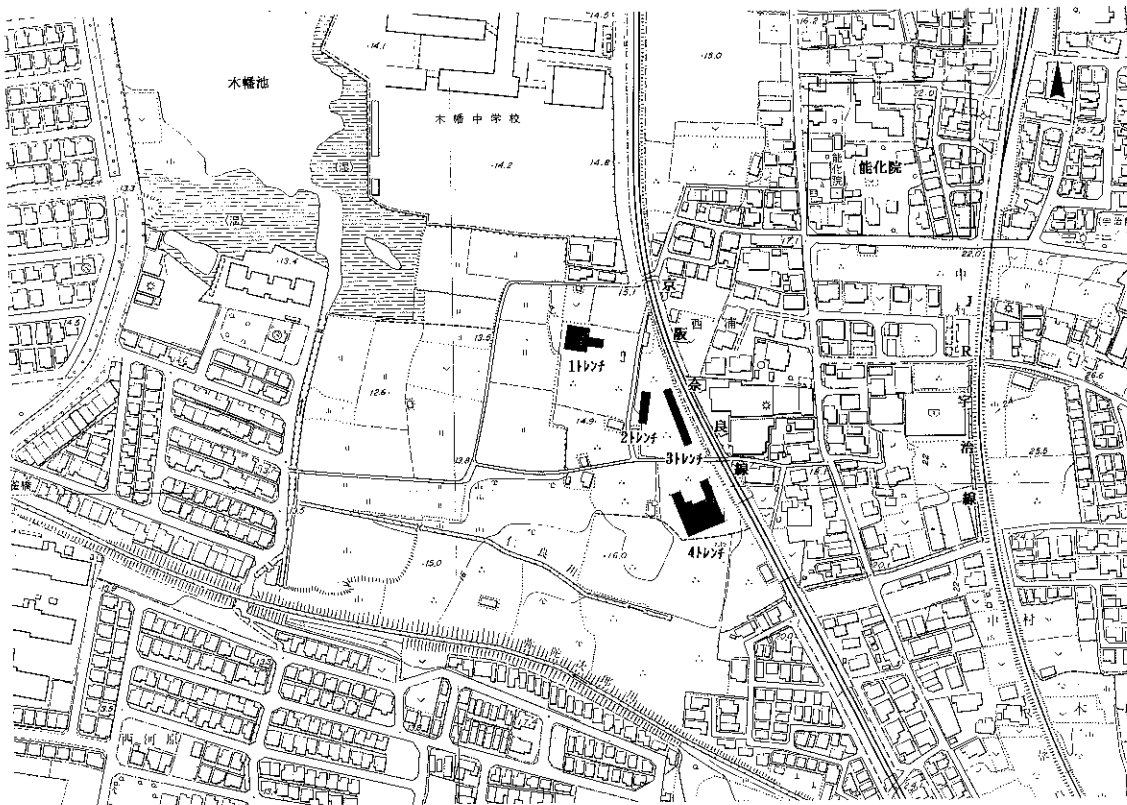
第2図 調査地の位置と周辺主要遺跡

B 歴史的環境

西浦遺跡周辺は、宇治市内において遺跡密度の濃い地域の1つといえる。特に古墳時代と平安時代には日本歴史上注目すべき遺跡が多く存在する。

調査地周辺の歴史は古い。旧石器時代の黒曜石製のナイフ形石器が二子塚古墳の盛土から発見されている。宇治では最古の先人の足跡といえる。縄文時代では二子塚古墳の盛土や古墳南の寺界道遺跡から後・晩期の土器や貯蔵穴が見つまっている。弥生時代は明らかではないが、古墳時代後期になると調査地南側の微高地上に全長112mの南山城最大の前方後円墳である二子塚古墳が突如この地に造営されるとともに、東側の木幡山丘陵に約120基に及ぶ木幡古墳群が形成される。奈良時代では二子塚古墳の南の寺界道遺跡で掘立柱建物群が展開する。¹⁾平安時代になると藤原基経以降、木幡山が藤原氏歴代の墓所として形成され始め、また数多く築造された墳墓群を弔うために、藤原道長によって浄妙寺が創建される。平家物語で著名な「殿下騎合」の事件にみえる摂政藤原基房が晩年木幡に松殿を造営、この地で没している。²⁾

交通関連では、巨椋池東岸の中心的津であり、奈良時代から江戸時代の長期にわたって繁栄を遂げた岡屋津が南にあった。中世には木幡観音寺や能化院・普門寺等数多くの寺院が造営された。



第3図 調査地の周辺地形図

Ⅲ 過去の調査と調査の経過

A. 過去の調査

西浦遺跡の発掘調査は、これまでに平成2年度と平成4年度の2度にわたり実施している。
(平成2年度の発掘調査)³⁾

木幡西浦50-1他での調査。2本のトレンチを設定し、南北溝1・不定形土壌2・流路跡1を検出した。遺物は遺構面上とこれら遺構面を覆っている砂層中より一面に散在する状況で出土した。遺物は6世紀代に比定できる須恵器片や埴輪片が少量出土するが、大半は近世陶磁器類であった。

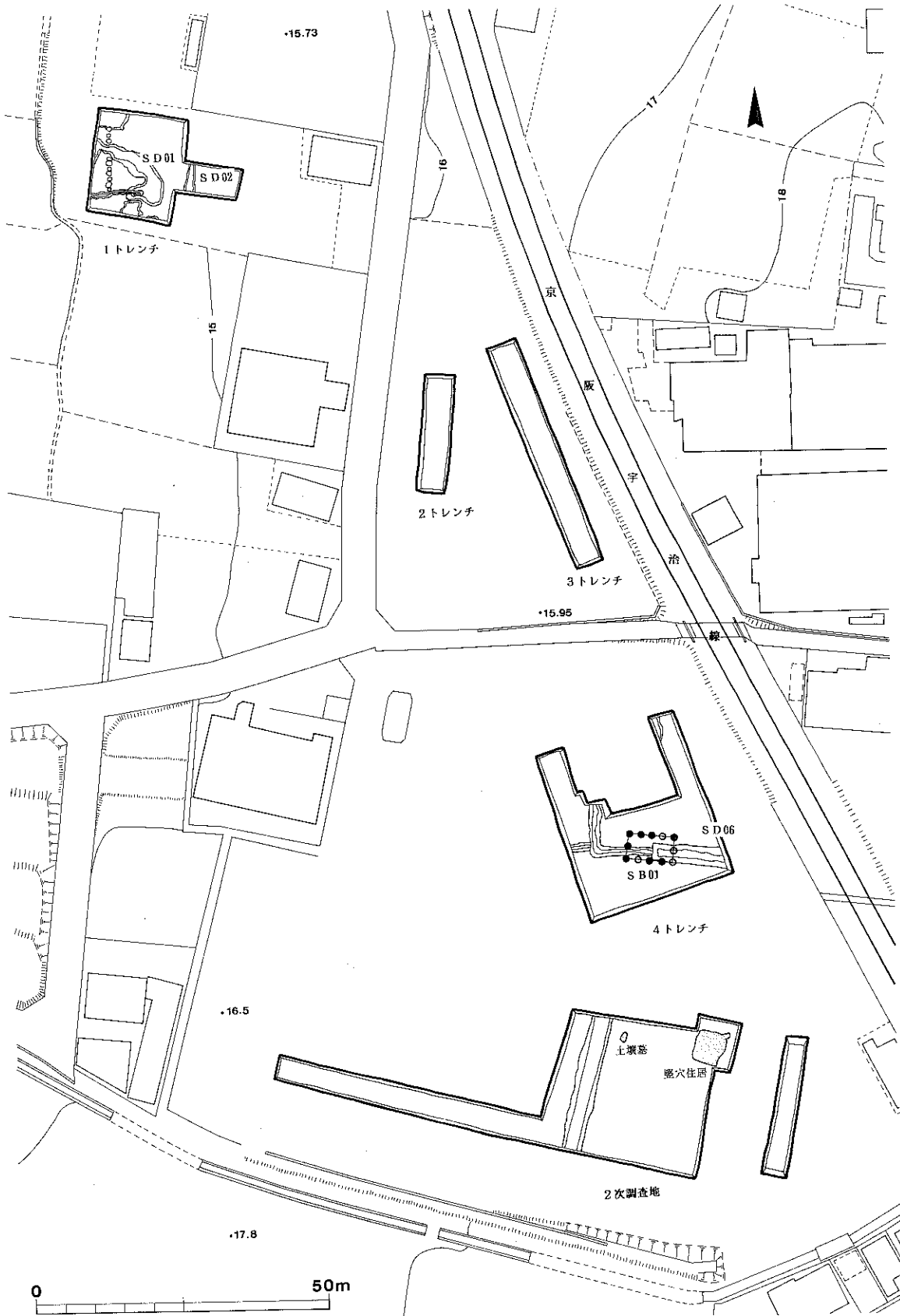
(平成4年度の発掘調査)⁴⁾

木幡西浦30他での調査。発掘調査の結果、竪穴住居跡1・中世墓1・東西大溝1を検出した。竪穴住居は東西5m、南北5mの方形プランで、北壁東隅にカマドが付設するものである。出土遺物から古墳時代後期の二子塚古墳築造頃と一致し、調査地一帯に二子塚古墳と関係をもつ古墳時代の集落の存在が想定された。中世墓は南北に主軸をとり、長軸1.7m、短軸0.8mを測る土壌墓である。土壌内に鉄刀が1本、棺上に瓦器椀1枚、瓦器皿4枚が副葬されたようである。瓦器椀から13世紀前半のものと考えられる。現在宇治市では中世墓は野神遺跡⁵⁾・西俣上り遺跡⁶⁾・山本古墓⁷⁾・善法古墓⁸⁾等が確認されているが、いずれも丘陵上に立地する。西浦遺跡の中世墓は、これまでの宇治の中世墓検出例とは異なり平地部での検出である。今後の詳細な検討が必要であるが、屋敷墓の可能性も考えられる等興味深い資料である。

B. 発掘調査の経過

調査地は、大きく3地区(北区・中区・南区)にわかれるため、それぞれ地区ごとに合計4トレンチを設定し、調査を開始した。北から順に1~4トレンチとした。

掘削にあたっては、まず重機による表土排除作業から開始し、遺構面を確認した後は人力によって遺構を検出した。中区で設定した2・3トレンチでは地表下約1mで地山面を検出したが、すでに重機による掘削によって、攪乱されており、遺構は確認できなかった。ただし土器が若干ではあるが出土したことから、攪乱以前には遺構が存在したと考えられた。北区の1トレンチはトレンチ西半分には瓦・土器の出土する「L」字状に曲る大溝を地表下約50cmで確認したため、調査はこの大溝を追う形で、調査範囲の可能な限りトレンチを拡大した。南区の4トレンチは、平成4年度調査の隣接地にあたることから、遺構の存在が十分想定された。ここでも地表下約2mで東西に延びる大溝を確認したことから、この高さで遺構の確認を行い、4トレンチ同様この大溝の内容確認を中心に調査を進めた。



第4図 トレンチ配置図

遺構が完掘段階に入ってから、トレンチの平面図・土層断面図を作成し、写真撮影を実施することによって記録を作成した。

発掘調査終盤の6月9日において報道への発表を行い、記録がすべて作成するに及んで埋め戻しを開始した。埋め戻しが完了した後、念のために1トレンチの東側に設定したプレハブ・駐車場の真下を掘り下げてみたところ、遺物がまとまって出土したことから可能な範囲で遺構の有無の確認・遺物の取り上げを行い、そして調査を終了した。

C. 発掘調査の体制

今回の発掘調査に関係する体制は下記のとおりである。

発掘調査体制

発掘主体者	宇治市教育委員会		
発掘責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
発掘担当者	同	社会教育課 文化財保護係 主事	杉本宏
	同		荒川史
	同		浜中邦弘
発掘事務局	宇治市教育委員会	参事	池田正彦
	同	社会教育課長	堀井健一
	同	社会教育課 文化財保護係長	吉水利明
	同	社会教育課 主任	加藤きみ江
調査補助員	新井朋哉・宮崎一弥		
調査整理員	時実奈歩・檜岡和歌子・畑陽子・久保千恵子 宮川千代実・志村みどり・佐野和恵・今西礼子		
土砂除去委託先	株式会社 発掘建設リンク		
写真測量委託先	株式会社 日開調査設計コンサルタント		
遺物写真委託先	寿福写房 寿福 滋		

発掘調査にご協力いただいた方々

本発掘調査の実施期間中に下記の方々から専門的な御指導・御教示、ならびに御協力をいただきました。記して感謝を表します。順不同・敬称略

上原真人（奈良国立文化財研究所）、藤本孝一・植山茂（京都文化博物館）、中村敦・前田義明（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、福田正継（岡山県古代吉備文化財センター）、川畑聡（高松市歴史資料館）、片桐孝浩（香川県埋蔵文化財センター）、赤松一秀（八幡市教育委員会）、鋸柄俊夫（財団法人大阪文化財センター）、高橋学（花園大学学生）、井上智代、宇治市歴史資料館。

IV 検出遺構

今回の発掘調査では、1トレンチと4トレンチで遺構を検出することができた。検出した遺構は掘立柱建物・溝・土壇・柵列などであり、主要遺構の年代は鎌倉～室町時代にかけてのものである。1トレンチは遺構密度が高く、また遺物量も最も多い。2トレンチと3トレンチについては現地表面下約1mまで掘り下げ、地山層と想定される黄褐色土層を検出するも重機による掘削が著しく、遺構は確認できなかったが、土器が若干なりとも出土していることから攪乱以前には遺構が存在した可能性は十分にある。

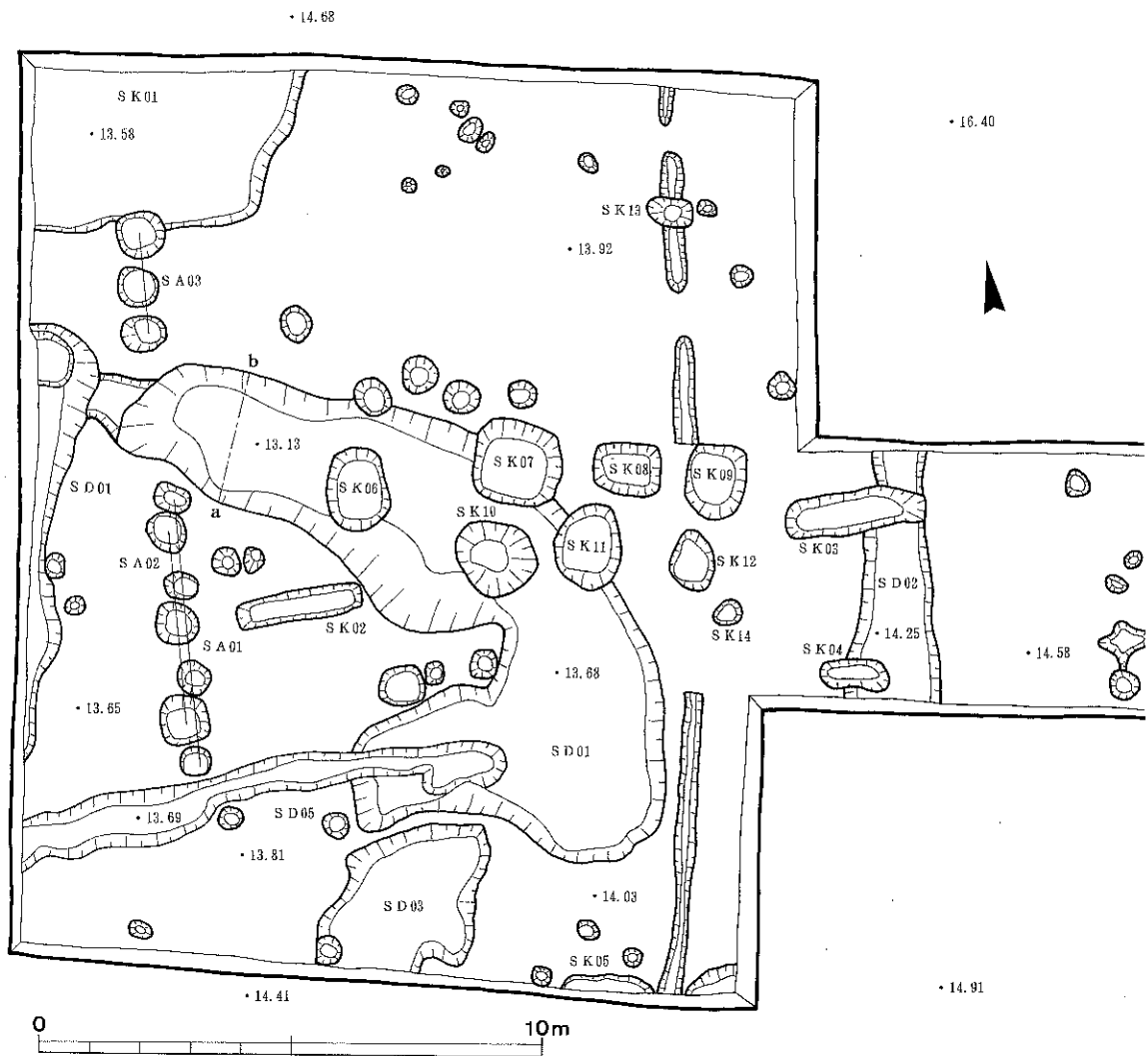
ここでは遺構の検出できた1・4トレンチについて順に説明する。

A. 1トレンチ (第5～9図)

土層の状況 1トレンチでの遺構検出面は標高14.7m～13.7mで東から西に向かって緩やかに傾斜していた。現地表面から検出面までは約60～75cm程で、今回設定した4トレンチ中、最も浅いところで確認できた。以下、土層の状況を上から順に説明していく。

現地表面から20cm程の厚さの表土層を掘り下げると、トレンチ全体に茶褐色の土層が確認できた。この層中に若干の中世土器が含まれていた。発掘以前の調査地は茶畑であったこと、またこの土層が畔状に下層を切り込む状況が看取されたことから、この土層は茶畑の耕作土層であると理解された。さらにこの茶褐色土層を掘り下げると、黒褐色土層がみられた。この層中にも中世土器はみられたが、遺構は確認できなかった。さらに掘り下げると、礫を若干含む黄褐色砂質土があらわれ、その面上で柱穴状の遺構がみられたことから、この黄褐色砂質土上で遺構確認を行った。下層の状況を確認するため、トレンチ西端で断割を実施したところ、遺物は1点も出土せず、さらに黄褐色土層が変化なくつづいていることから、この層を地山層であると判断した。またこの遺構面の土層にあたる黒褐色土・茶褐色土から出土した中世土器については、出土状況から遺構基盤面である黄褐色土層の上層が削平された際の混入品と考えられる。

溝SD01 「コ」字形に曲がる大溝である。溝底面は東から西に向かって緩傾斜し、深さは検出面から深い西側で約30cm、浅い東側で約10cmを測る。高低差は0.7m程ある。幅は2.5m～3.5mを測る。溝埋土は深い西側で4層に大きくわかれる。浅い東側は単一層である。土層の状況から深い地点からしだいに埋まっていったと想定される。トレンチ西壁面に沿って延びる溝は規模・深さ等不明である。その後、後述する柵列SA01・02との交差点で後に黄褐色砂質土によって土橋状のものが付設されたようである。溝の埋土からは上層・下層いずれよりも中世の遺物が多量に出土し、古墳時代の土器がその中に若干含まれていた。

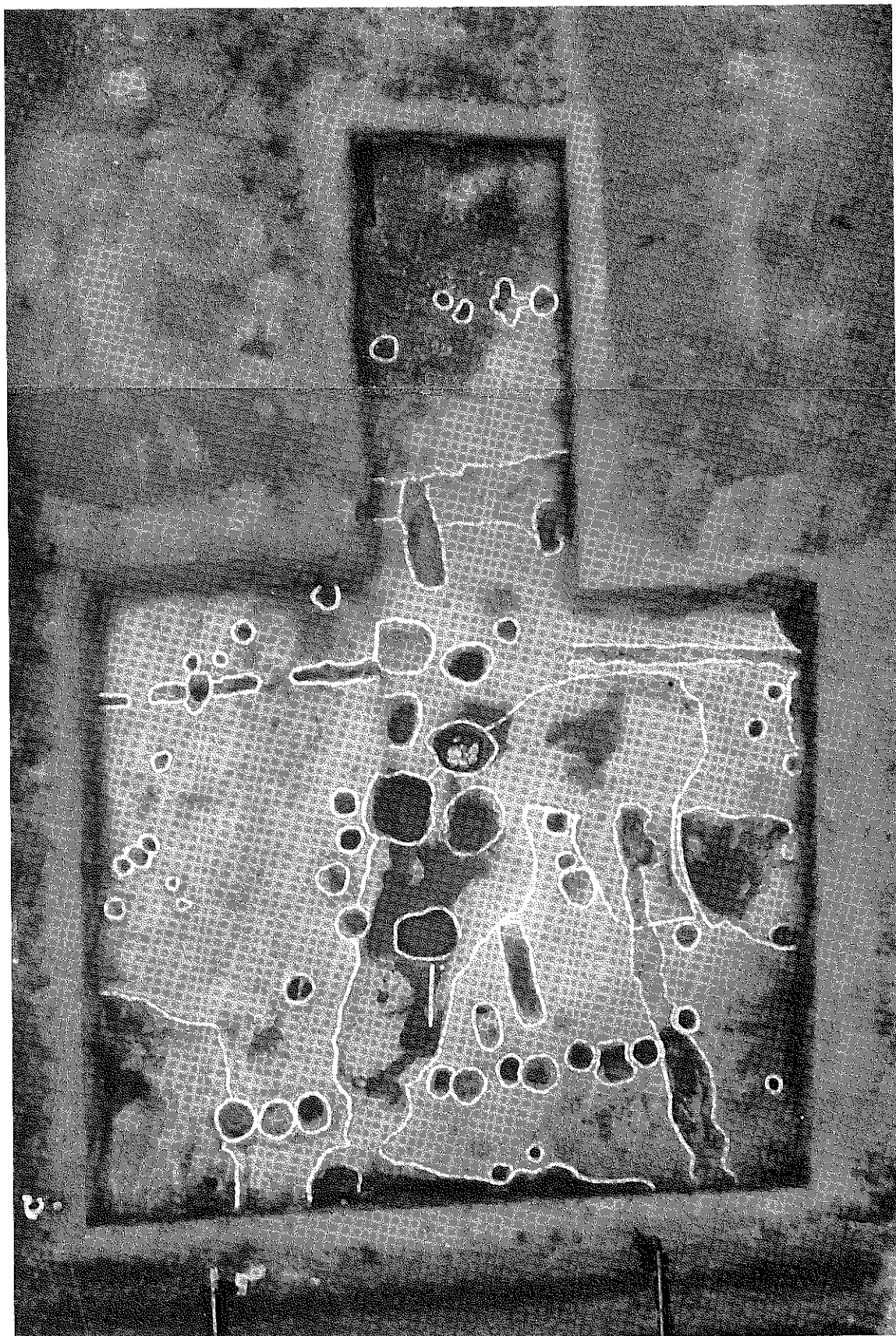


第5図 1トレンチ遺構配置図

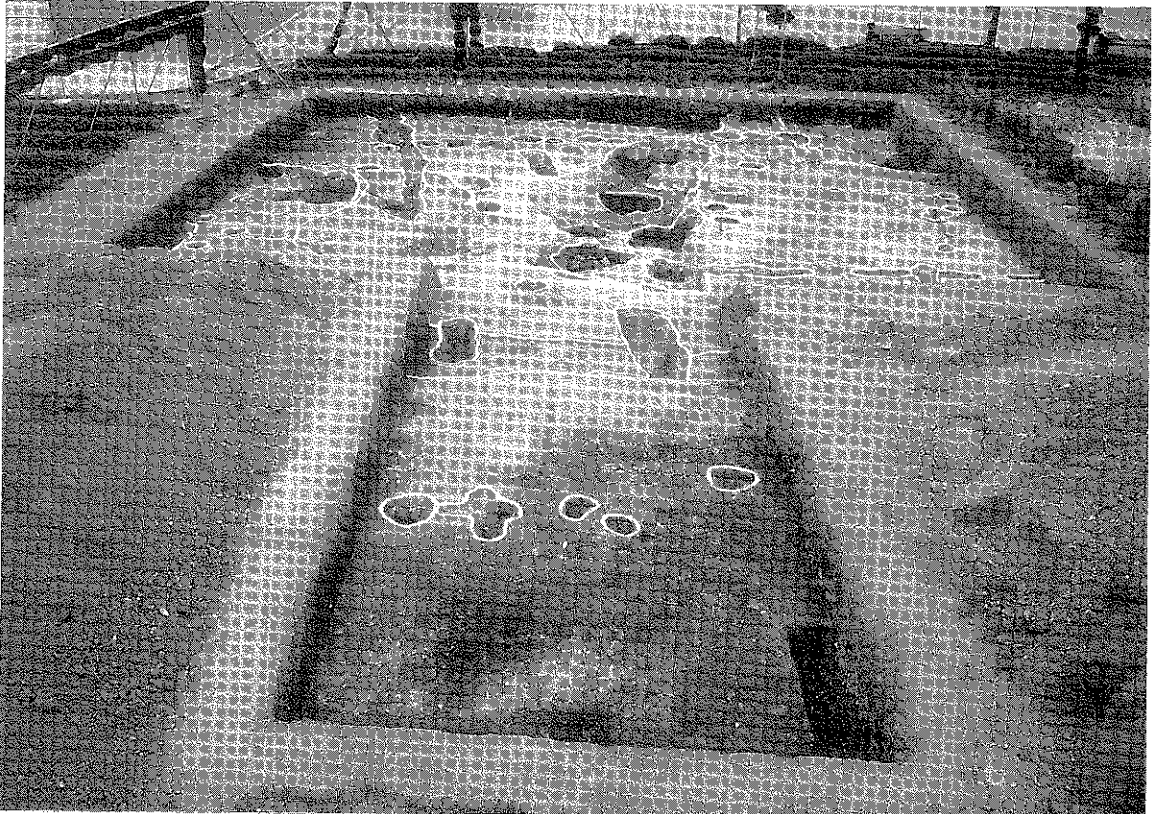
溝の埋土からは他の遺構とは異なって完形品の土師皿・碗がかなりの数で出土しており、また量の多さもさることながら非常に多種類の土器片がみられた。状況的にみて、溝埋土の土器群は、単なる混入品ではなく意識的にこの溝に廃棄された可能性が高い。ただしこれはあくまでも溝が埋まっていく過程、つまりは溝本来の機能が失われていく過程における溝の利用状況を土器は示し、溝の掘削当初の機能とは区別されると想定される。現状では溝が「コ」字に曲がることを考慮して、何かを区画する溝として当初は設計掘削されたと考えている。

溝SD02 トレンチ東側で検出した南北方向の溝である。幅約2.3~3.0mで深さは検出面から10cmを測る。溝の底面は舟底状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層である。溝内から瓦器・青磁・羽釜・土師皿・常滑甕・捏鉢の中世土器が出土する。SK03・04に先行する。

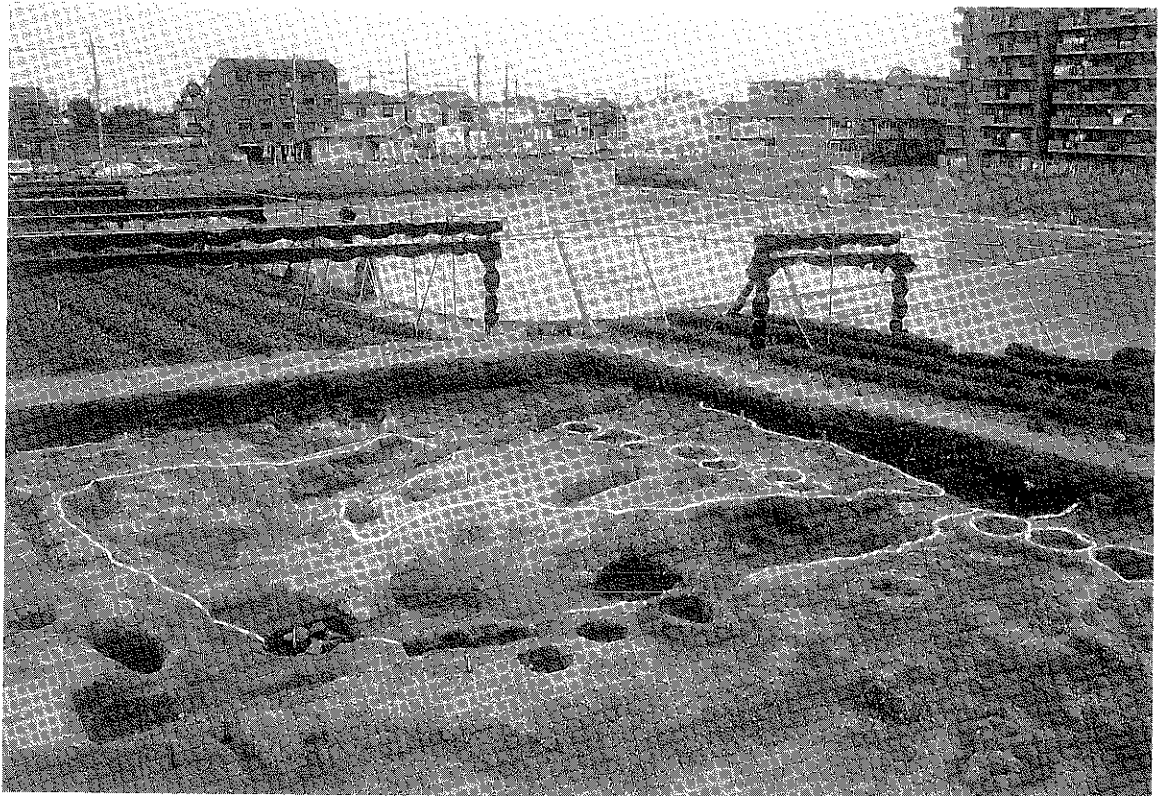
溝SD03 トレンチ南壁面に接して検出した溝で規模は不明。SD01との接点で途絶えることからSD01と同時期の遺構かもしれない。



第6図 1トレンチ上空写真(上が東)

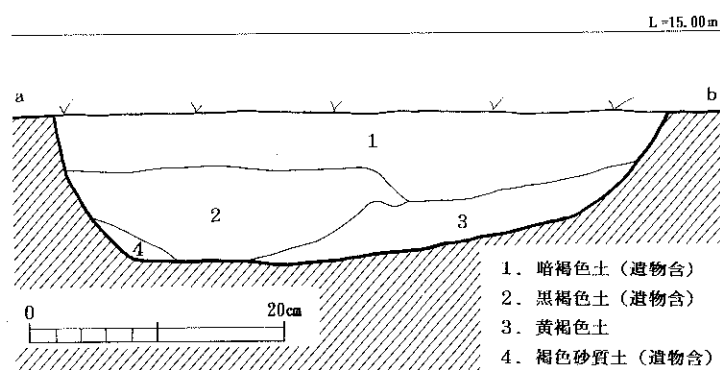


第7図 1トレンチ全景（東から）



第8図 S D01全景（北東から）

溝SD05 トレンチ西壁から東に向かって延びる溝で幅0.5～1mを測る。溝が丁度SD01との接点で途絶える。溝底は東にむかってわずかに傾斜する。埋土から須恵器甕・杯蓋・土師器が出土した。出土した土器群は古墳～奈良時代にかけてのものであるが、SD01と切合い状況から、出土した土器はこの遺構の年代を示さない。



第9図 SD01埋土状況図

柵列SA01 トレンチ西側で検出した、南北に3間の柵列である。堀方は直径約0.5～0.7mの円形状を呈する。柱間は約1.6m。柱穴痕は確認できなかった。無遺物。

柵列SA02 SA01と近接して検出した2間の柵列である。柱間は約1.8mで、堀方は直径約0.8～0.9mの円形状を呈する。柱穴痕は確認できなかった。SA01と近接並行しており、状況的にはSA01の立て替えに伴う柵列の可能性が想定される。埋土から土師器が出土した。

柵列SA03 SA02と堀方規模・方位を同じくする2間の柵列である。柱間は約0.75mで堀方規模等から柱は非常に近接して状態で並んでいたと想定される。埋土から瓦器・三足釜の脚部・捏鉢・土師器が出土した。

SA02との関係については柱間寸法が異なるものの方位・掘方規模から同時期に存在したものと考えられる。またSA02との間に存在する溝SD01については堀方の土器と溝埋土の土器との時期差は認めがたく、また溝のところでは、柱列がなくなっていること等からこれらの柵列はSD01と関係をもった遺構であると考えられる。

土壌SK01 トレンチ北壁西隅で方形状の遺構を検出した。竪穴住居跡の一部とも考えられるが、底面の凹凸が激しいことから明らかにしえない。埋土は単層の黒褐色土で、古墳時代の甕・杯身が出土した。

土壌SK02 長さ約2.5m、幅約0.6m、現存深さ約0.3mを測る方形状の土壌である。須恵器が出土した。

土壌SK03 長さ約2.8m、幅約0.8m、現存深さ約0.3mを測る方形状の土壌である。土師器・羽釜、須恵器の甕と中世・古墳時代の遺物が混在する。土壌の形態がSK02と類似し、さらにSK02と一直線上に並ぶ等、SK02と一連の遺構として理解できる。

土壌SK04 長さ約1.3m、幅約0.5m、現存深さ0.4mを測る土壌である。SK02・03と方位が一致する。埋土から瓦・青磁・羽釜・常滑甕・捏ね鉢・土師皿の中世土器が出土。

土壌S K 05 トレンチ南壁面で一部を確認したため、規模は不明。三足釜の脚部が出土。

土壌S K 07～12 トレンチ中央で検出した、近接する6個の土壌である。直径0.9～1.8m程と大きさにはばらつきがみられる。切り合いからS D 01より後出。S K 11では拳よりやや大きめチャート質・砂岩質の礫が充填されていた。三足釜の脚部が礫に混在して出土した。S K 08から捏鉢・製塩土器・土師皿・瓦器・土師器、S K 10から瓦器・土師器、S K 12から瓦器・土師器・中世須恵器が出土した。

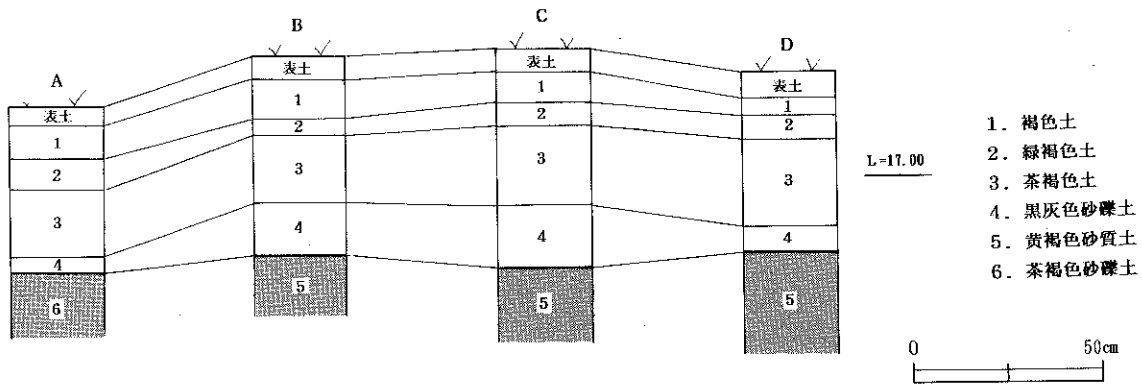
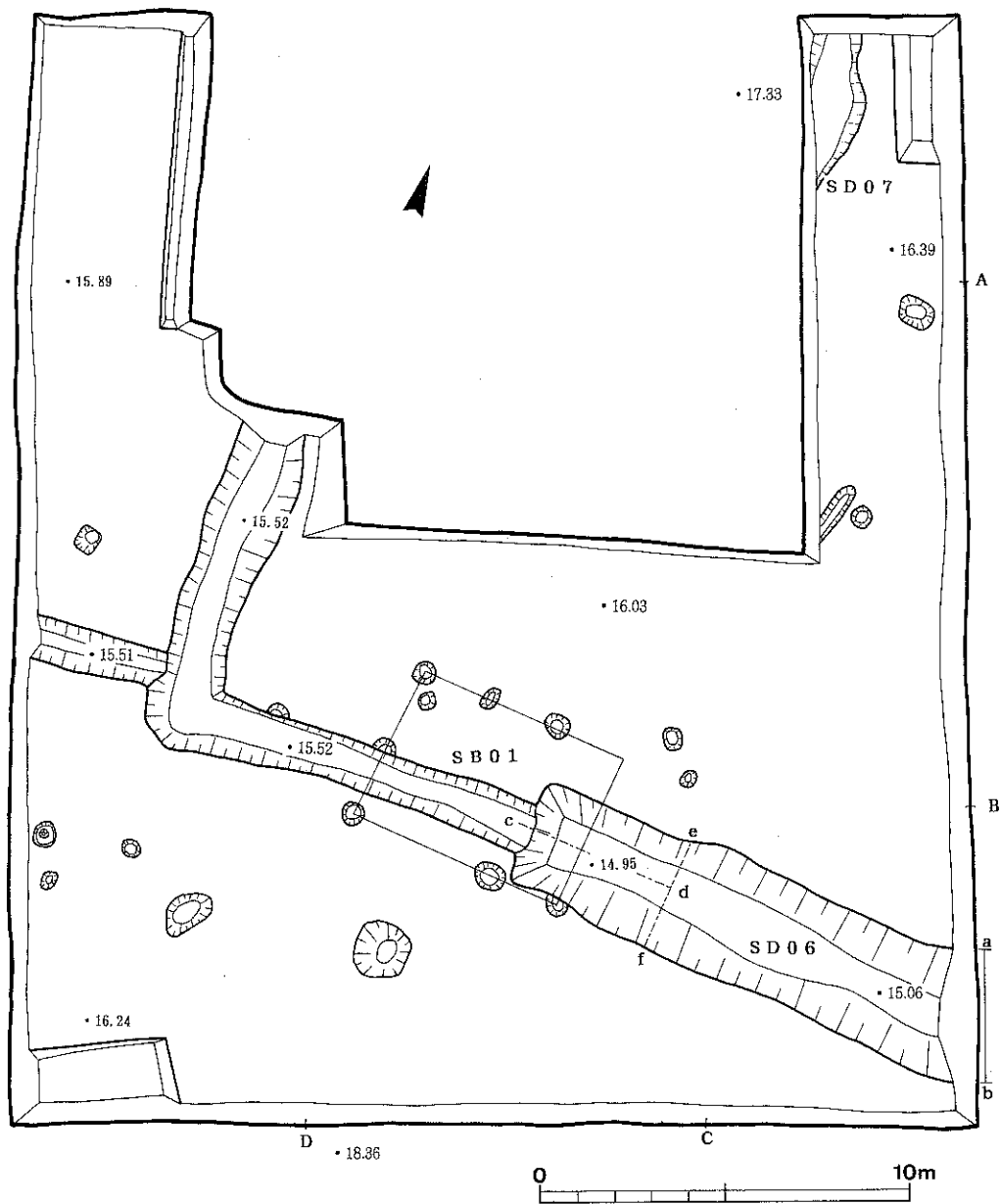
土壌S K 06 直径1.25～1.5 mのやや南北に細長い土壌である。S D 01より後出のものである。埋土から土師皿・羽釜・瓦器・瓦・鉄片が出土した。

B. 4 トレンチ (第10～14図)

本トレンチは、昨年度調査地の北隣接地にあたり、昨年度の調査では竪穴住居・中世墓・溝が検出されたことから当然遺構の存在が想定された。ただし遺構面を形成する層が砂・礫の堆積層であったことから遺構の確認が難しく、大溝・掘立柱建物・土壌等を検出したにすぎない。土層の状況は約1.5m間隔で茶畑耕作の痕跡がみられた以外は、基本的には平行堆積である。比較的安定した状況を示している。遺構面に達するまでほとんど遺物がみられなかった。

大溝S D 06

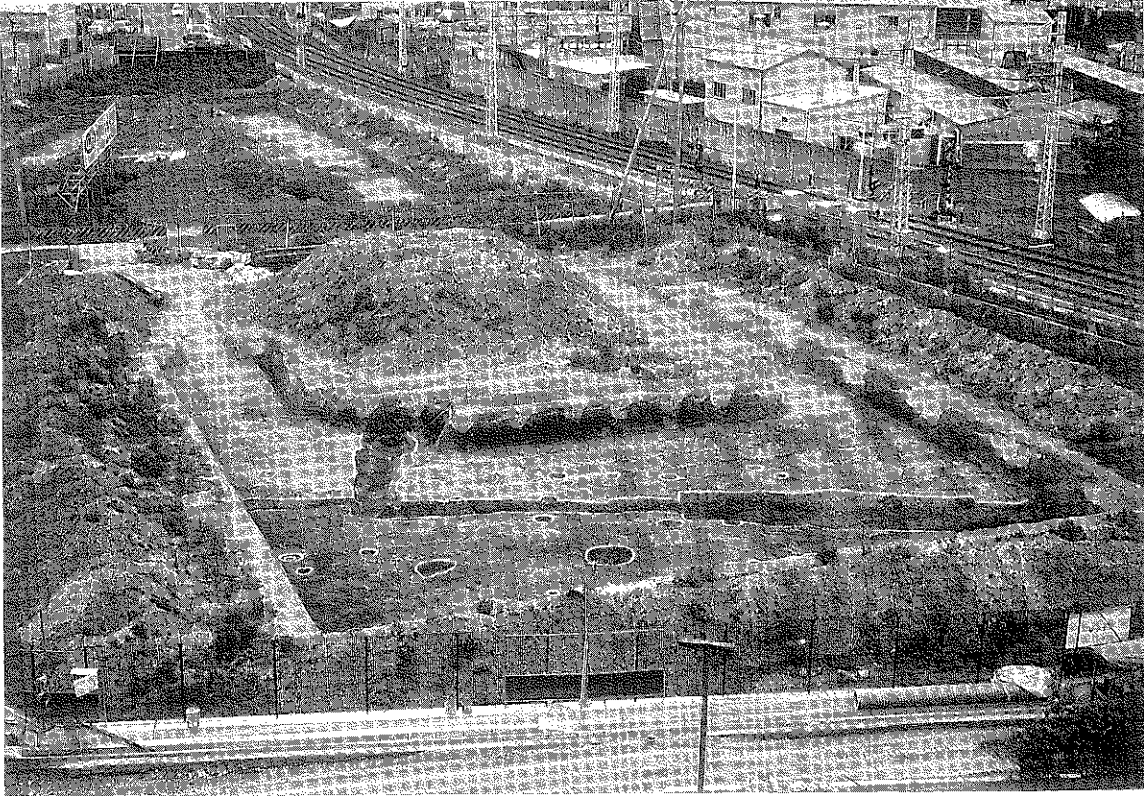
「L」字状に屈曲する溝である。溝は調査地外にさらに続くため、溝の全体的な様相は不明である。溝は、トレンチ中央から東に急激に幅広く、深くなる。幅広部での溝の幅は約2.8～3.4m、深さは約1.2mを測る。埋土は礫層と褐色土層の互層で、溝は幅狭から幅広への変化地点から漸移埋まっていく状況が看取できた。礫層については、大小様々な礫が乱雑に堆積する。状況的には礫の堆積層は人為的によるものの可能性が高いが、その性格は不明である。溝が完全に埋没してなくなる最終時の埋土は、褐色土層である。遺物は少量ではあるが礫層・褐色土層ともに含まれていた。古墳時代と中世期のものがある。幅狭部の溝は、幅が約2.05m、深さが約0.5mである。埋土は褐色土層の単一層である。溝の屈曲部付近で幅1.2mの西から延びる溝が付設するが、溝底のレベル差からみて後に付設された溝と考えられる。溝全体の変遷について埋土状況からみると、溝は幅広部からしだいに埋まり始める。溝の幅もそれに応じて狭くなっていく。幅広部が幅狭部と同一の深さになった時点で、幅も幅狭部と同じ状況になる。そして褐色土の埋土によって溝全体は完全に廃絶した。次に溝底の高さについてみると西から東に向かって溝底が深くなる傾向が読み取れる。これは東から西に傾斜する周辺の地形状況と逆行する。排水としての機能のみであれば、東側の巨椋池に向かって傾斜するのが極く自然であろう。東側には川はない。この状況からみれば単に排水としての機能ではなく、別の機能をもあわせもつ溝であったとここでは想定しておきたい。



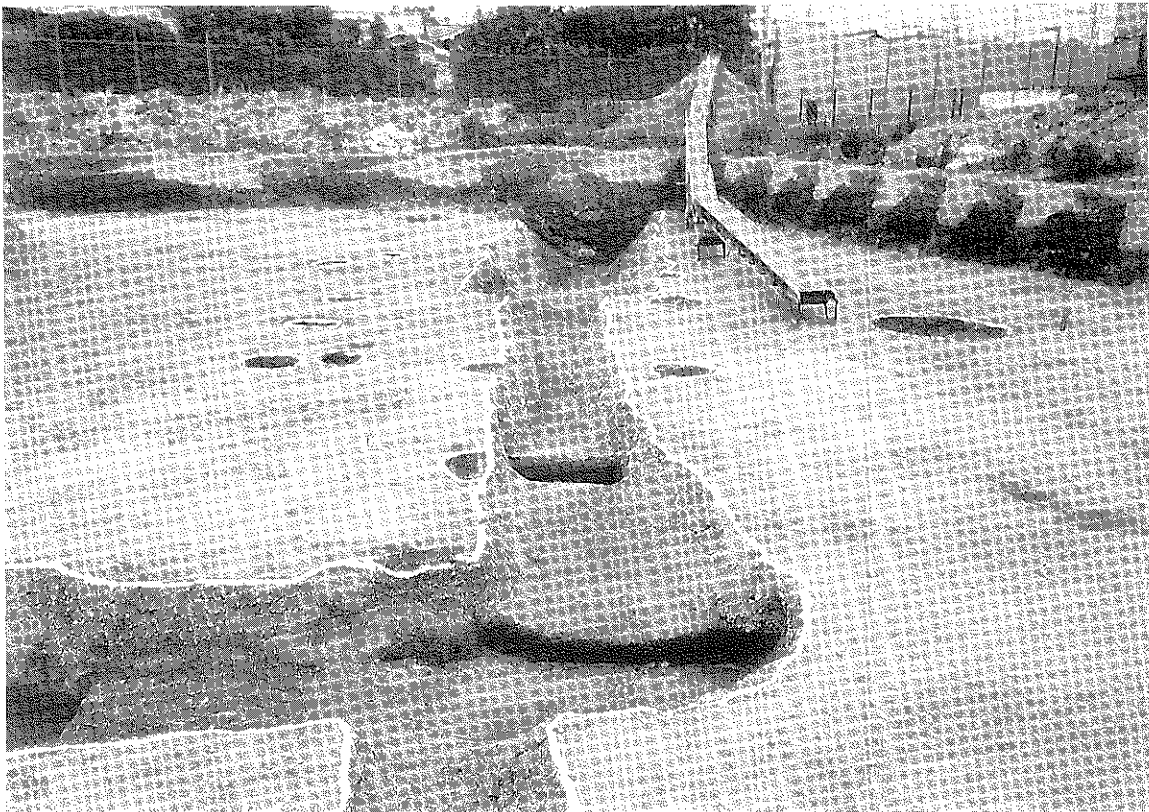
第10図 4トレンチ遺構平面図及び基本層序



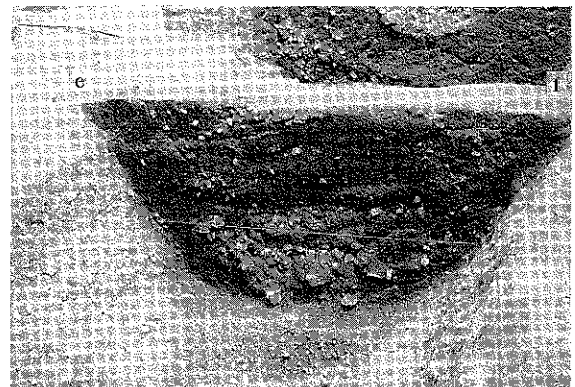
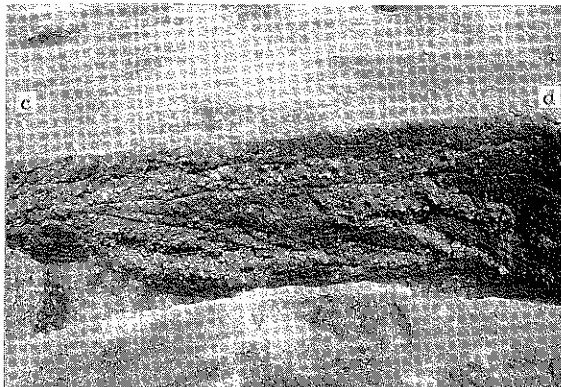
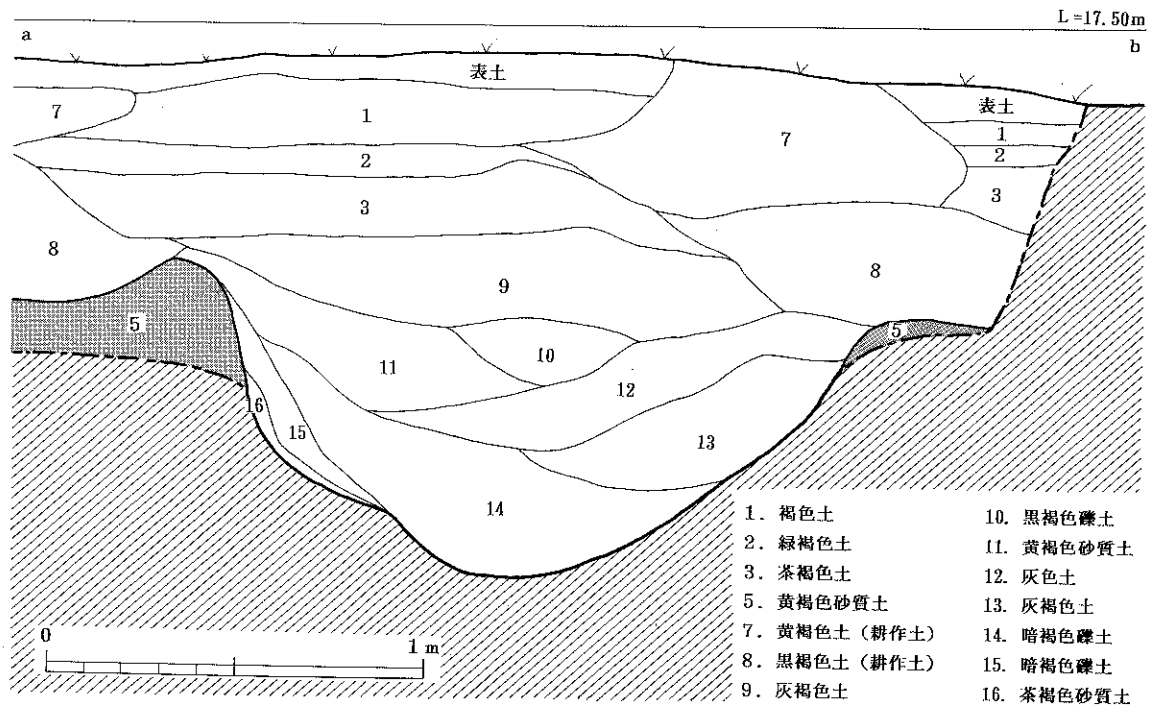
第11図 4トレンチ上空写真（上が北）



第12図 4トレンチ全景（南から）



第13図 溝 S D06及び掘立柱建物 S B01（西から）



第14図 SD06埋土状況図

溝SD07 トレンチ北東で南北に走る不定形の溝を検出した。規模は不明。黒褐色土の埋土。古墳時代の須恵器杯身・土師器甕出土。

掘立柱建物SB01 3間×2間の東西棟の掘立柱建物であると考えられる。桁行全長約4.15m、梁間全長約5.55mである。柱穴堀方は直径約0.5mの円形状を呈する。柱穴跡は確認できなかった。堀方がSD06にきられていることから、SD06に先行するものと思われる。堀方内より遺物が出土したが細片であり、建物の時期不明。

V 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱にして17箱である。その内8割が鎌倉から室町期のもので、2割が古墳期から奈良期のものである。種類は土器を主に瓦や埴輪、石製品、鉄製品等がある。古墳期から奈良期にかけての遺物の大半は中世遺物と混在して出土しており、古墳期から奈良期の遺物は、鎌倉期の宅地造成等によって削平されてしまったと考えられる。今回の発掘で検出した主要遺物の時期が中世期であることから、出土した中世遺物を中心として検討することとした。したがって今回の報告では、トレンチごとに中世遺物を中心として説明する。

A. 1トレンチ（第15～21・23～28図）

このトレンチで出土した遺物は整理箱にして15箱である。その遺物の大半が溝SD01からの出土である。SD01出土の遺物は前述のように意図的に廃棄されたものと考えられた。一括資料とはいえないまでも、その導き出された遺物の性格からこの資料をまとめることによる一時期の食器組成がある程度集約されているのではないかと考えた。このためSD01出土の遺物を中心に整理を行っていった。古墳期から奈良期の遺物は最後に記述する。

SD01出土遺物（第15～20・23～27図）

今回出土した遺物は土師器をはじめとして、瓦器、瓦質土器、製塩土器、須恵器、青磁・白磁等の輸入陶磁器など非常にさまざまな土器がある。古墳時代の遺物は少量である。

出土遺物の大半が細片であり、また図示できるものが極めて少ない。このため、土師器・瓦器・羽釜については、口縁部の諸特徴から分類を行い、模式図によって遺物の特徴と示した。最初に模式図の土器について述べ、次に図化可能な土器・石製品等を見ていく。

鎌倉～室町期

模式図（第15図）

土師皿 土師皿については1、色調（褐色・白色）と2、大きさ（大皿・小皿）に分類し、その後で口縁の諸特徴によって分類を行った。なお分類の説明の最後につく番号は第16図に示した土器の番号である。

I類・褐色系（第17図）

大皿（口径約11cm）

- 1 口縁を強く横ナデして外反する
 - a 口縁を素直におさめる（8～11）
 - b 外面が横ナデにより段が明瞭に残る（14・15）

- c 口縁が細く尖り気味になる (12・13)
- 2 口縁が直線的に立ち上がる (16・17)
- 3 口縁の立ち上がりが短く、外上方へ開く (18)

小皿 (口径約 7～9 cm)

- 1 口縁がゆるやかに立ちあがる (1・4)
- 2 口縁がやや直線的に立ちあがる (5)
- 3 口縁の横ナデにより口縁部と底部との間に段がつく (2・6)

Ⅱ類・白色系

大皿 (口径約13cm)

- 1 口縁をナデて尖り気味になる (22)
- 2 口縁をまるくおさめる (23～25)

小皿 (口径約 7～9 cm)

- 1 口縁は外上方に開き底部が突出する、いわゆるヘソ皿である (19・20)
- 2 口縁がやや直線的に立ちあがり、椀状を呈する (21)
- 3 口縁が短くゆるやかに立ちあがる
- 4 口縁を内側に折り込む、いわゆるコースター形の皿である

瓦器椀

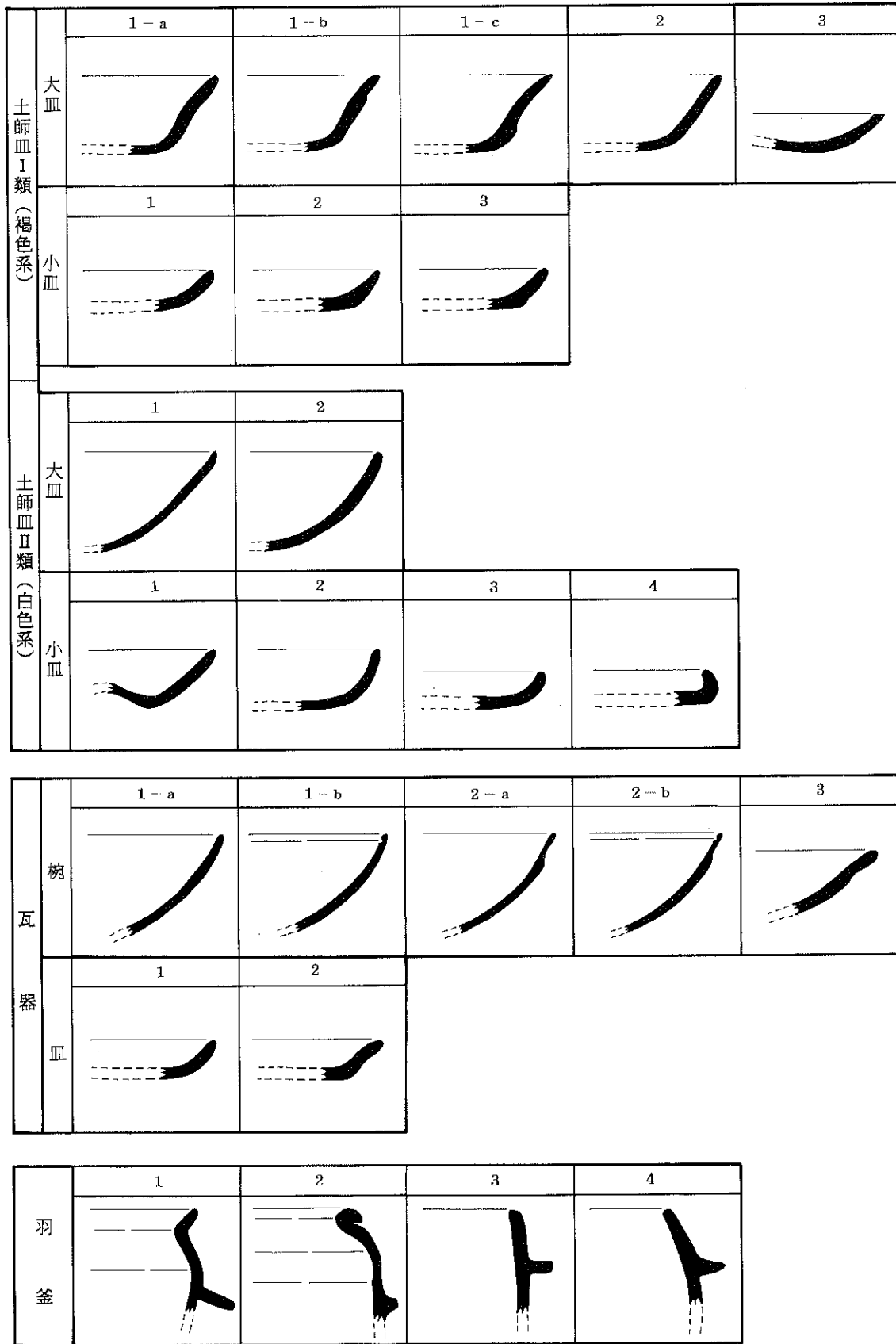
- 1 口縁を丸くおさめるもので、沈線があるもの (b) と沈線がないもの (a) とに細分される (a は 1、b は 2・5)
- 2 口縁を強くナデ、外反させるもので、沈線があるもの (b) と沈線がないもの (a) とに細分される (a は 4・b は 3)
- 3 口縁は外上方に開き、端部は丸くおさめるもので、いわゆる和泉型瓦器椀である。

瓦器皿

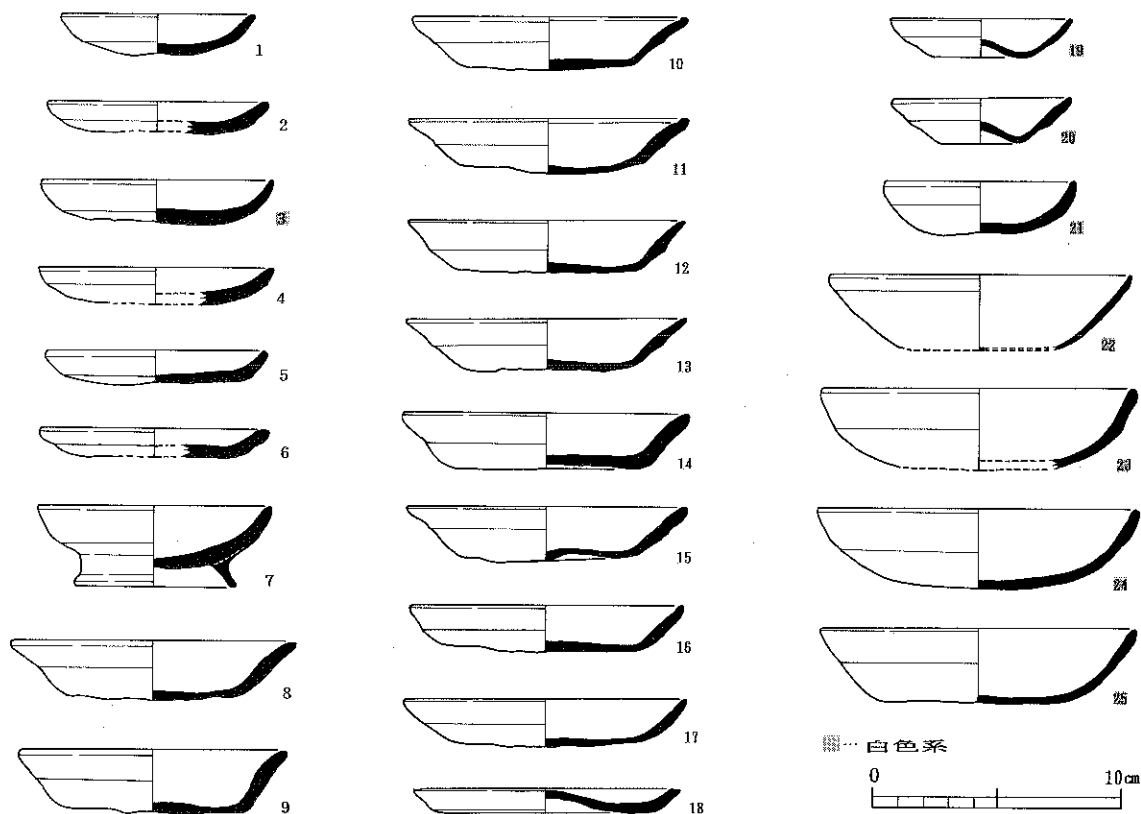
- 1 口縁を丸くおさめる
- 2 口縁を強くナデ、外反させる

羽釜

- 1 口縁が「く」の字状に外反する
- 2 口縁を外折する
- 3 口縁が直線的に立ち上がる
- 4 口縁が内湾ぎみに立ち上がる



第15圖 SD01出土土器模式分類圖



第16図 S D01出土土師皿実測図

輸入陶磁器 (第17図6～9)

6は釉を全面に施し後で口縁部にかかった釉を掻き取る、いわゆる口禿げの白磁皿である。口径9.6cm、器高2.5cmを測る。これより小型品もみられる。数点出土。7は青磁碗で、高台の径は3.4cmの高台断面は三角形状を呈する。明緑色の釉を全体に厚く施し、高台端部の釉を後で掻き取る。露台箇所と施釉された部分との境は赤く発色する。体部外面に細長い蓮弁を削り出すが、厚い釉のために、鎬は不明瞭である。9も青磁碗である。暗緑色の釉を全体に施し、底部外面のみ無釉である。高台径は4.8cmを測る。高台断面は長形状を呈する。底部内面にヘラで草花文を装飾する。8は青磁皿で底部径は4.8cmを測る。灰緑色の釉を全体に施し、底部外面のみ施さない。底部外面には糸切り痕跡が明瞭に残る。底部内面にはヘラと櫛によって花文様を表現する。10は青白磁の合子の身で口径4.6cm、器高2.0cmを測る。空色の釉を全体に施し、受け口部・底部は施さない。体部外面に蓮弁をやや粗く削り出す。合子は宇治市では善方古墓・西隼上り遺跡に出土例が知られる。8・9はいずれも意識的に体部を打ち欠いて底部を残し、2次利用の可能性がある。

ミニチュア製品 (第17図11・12)

11は瓦質の足釜で、口径4.5cmを測る。罫が断面三角形状を呈し、足は罫直下に取り付く。灰白色で、焼成は良い。12は口径9.2cmを測る土師質の土器である。乳灰色で焼成は良い。

受け口を巡らすことから、これに見合う蓋の存在が想定される。外面には受け口から下に全体に煤が付着する。

高杯（第17図13）

土師質の高杯の脚部である。灰白色で焼成は良い。外面は縦方向のヘラ削りを施す。

類製塩土器（第17図14）

外面は、ほとんど調整を施さないために、粘土紐を輪積みにした痕跡が顕著にみられる。内面はナデ調整し、一部に粘土紐の痕跡が残る。口縁端部は面取りし、口径18cmを測る。数点出土した。管見の限り、平安京内でしか検出例が確認できなかった。

石鍋（第17図15）

鏝は断面台形のやや下向きに削りだす。頸部は内湾し、口縁端部は面を持つ。鏝部付近にはノミの加工痕が明瞭に残る。内面は平滑に仕上げる。出土した際、鏝下部には煤が付着していたが、加工して平滑状に仕上げた痕跡が断面にみられることから2次利用の可能性も考えられる。滑石製。

捏ね鉢（第17図16）

須恵質の捏ね鉢で、口径27cmを測る。体部が直線的に立上がり、口縁部は上方にやや拡張肥厚する。内面は使用による摩耗がみられる。数点出土した。

甕（第17図17・18）

甕が体部片のみで全体像は不明であるが、外面の叩き痕跡から2種類の甕が存在する。1つは外面に長形状の格子の叩きを有すもの（17）で、内面はナデというより指押さえによる調整といった感が強い。一部に粘土紐の痕跡みられる。暗灰色を呈し、器壁は約1.1cmを測る。瓦質焼成か。もう1つは外面に平行叩きを有すもので、内面はナデ調整である。茶褐色を呈し、器壁は約0.7cmを測る。瓦質焼成。

盤（第17図19）

口縁端部は面をとり、内側に若干肥厚させる。口径は38cmを測る。瓦質焼成、黒灰色。

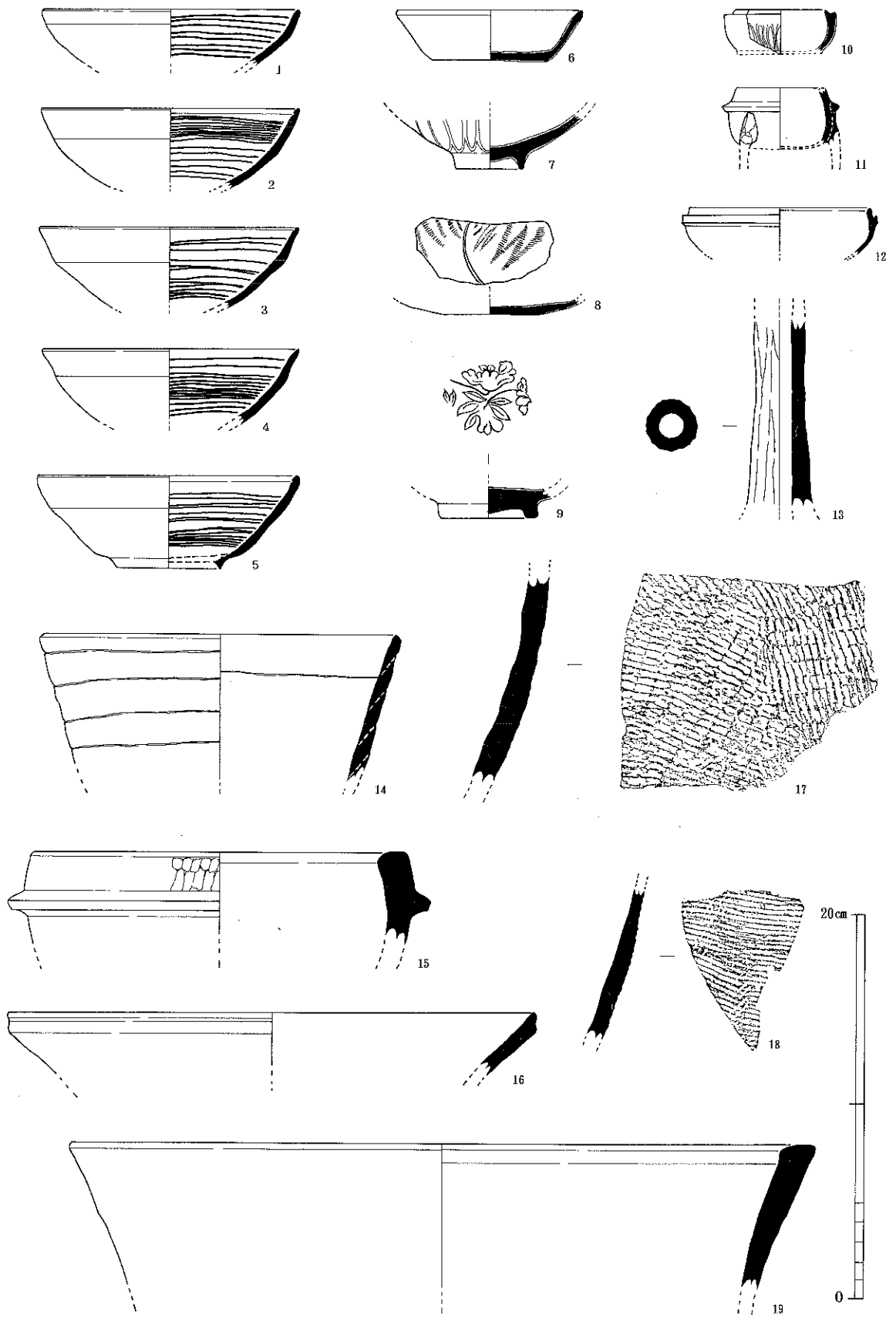
鍋（第18図1・2）

1・2はいずれも瓦質焼成で口縁部が「く」字状を呈する鍋である。1は口径20.6cmを測り、体部内面には細かい横方向のハケ目がみられる。2は口径23.8cmを測り、体部外面には指押さえで調整するも粘土紐の痕跡が明瞭に残る。

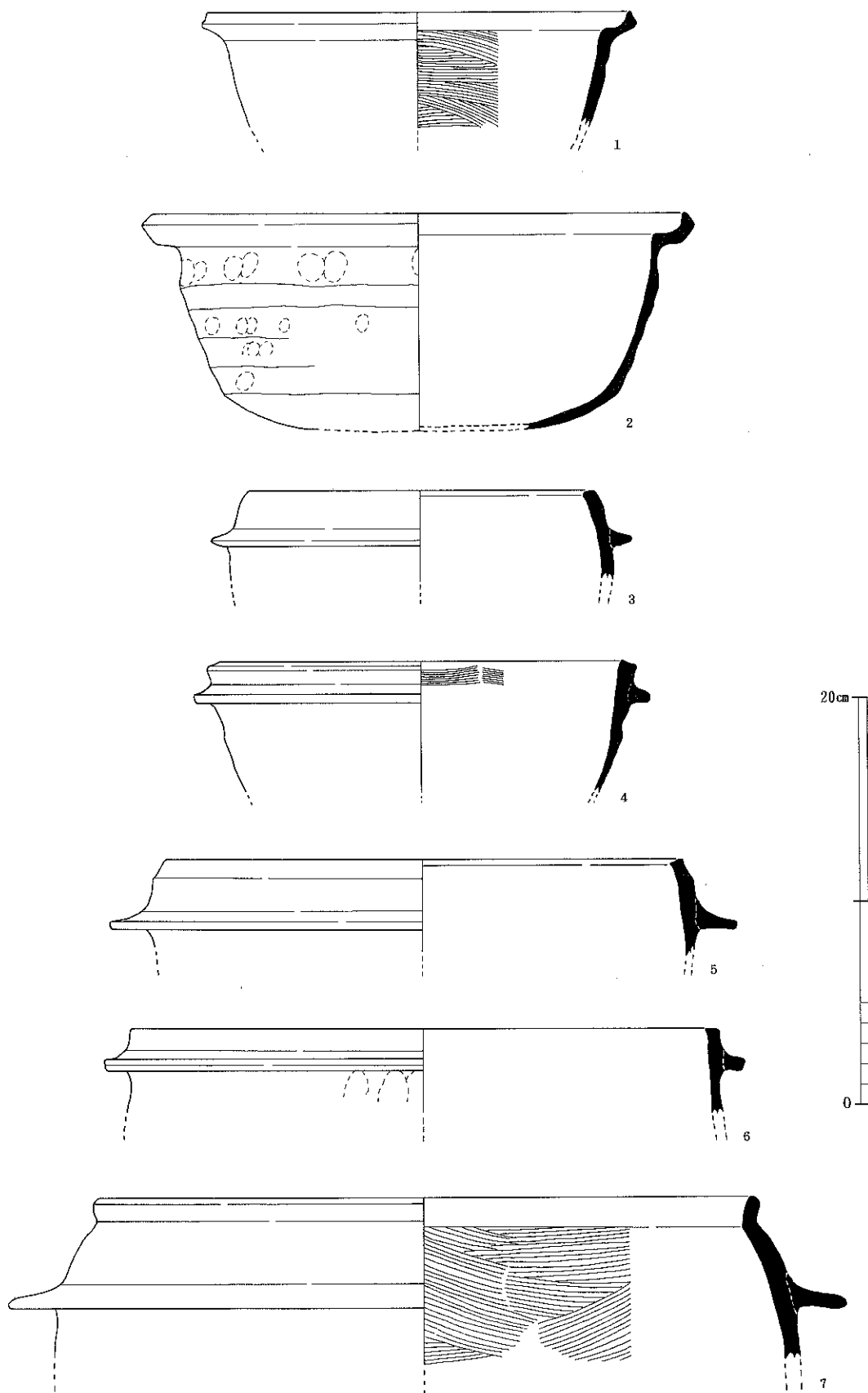
出土した鍋細片は内外面の調整や、口径によってさらに分類が可能である。

羽釜（第18図3～7）

3は頸部は内湾ぎみに立上がり、口縁端部は内傾する。鏝は断面三角状を呈する。口径は16.8cmを測り、黒灰色、焼成は良い。瓦質焼成。4は頸部は外反ぎみに立上がり、口縁端部



第17图 S D01出土遺物実測図



第18图 S D01出土遗物实测图

は端部は外傾する。鏝はやや下向きに取り付き、断面は長方形を呈する。口径19.6cmを測り、黒灰色、焼成は良い。瓦質焼成。5は頸部がやや内傾して立上がり、口縁端部は内傾するもので口径は25cmを測る。口縁部外面につよいナデを施す。鏝は大きく突出し、断面は長方形状を呈する。赤褐色、胎土は粗く砂粒が目立つ。土師質。6は頸部はほぼ直線的に立上がり口縁端部はほぼ水平に面を有すもので、口径は28.4cmを測る。鏝はやや下向きに取り付き断面は正形状である。瓦質焼成で、黒灰色、焼成は良い。鏝下部に指押さえの痕跡みられる。7は内湾する体部に外折する口縁部を呈するもので、口径31.6cmを測る。口縁端部は外傾する。鏝は大きく突出し、やや下向きに取り付く。内面には横方向のハケ目が顕著にみられる。

瓦 (第19図)

出土した瓦は、整理箱にして約3箱分であり、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の種類が認められる。いずれもS K01埋土上層より出土した。ここでは軒瓦を中心に説明をする。

軒丸瓦

軒丸瓦は1型式2種類ある。

1は左巻き三巴分を主文とするものである。巴の頭はやや丸みを帯び、尾の端は圏線に接しない。外区には14個の珠文が巡る。瓦当直径約11cmでややいびつな形態である。表面は黒灰色を呈する。今回出土したこのタイプの瓦はすべて1箆で製作される。9点出土。

2は左巻き三巴文を主文とするものである。巴の頭はやや尖り、尾は長い。瓦当直径約11cm。表面は黒灰色を呈する。1個体出土。

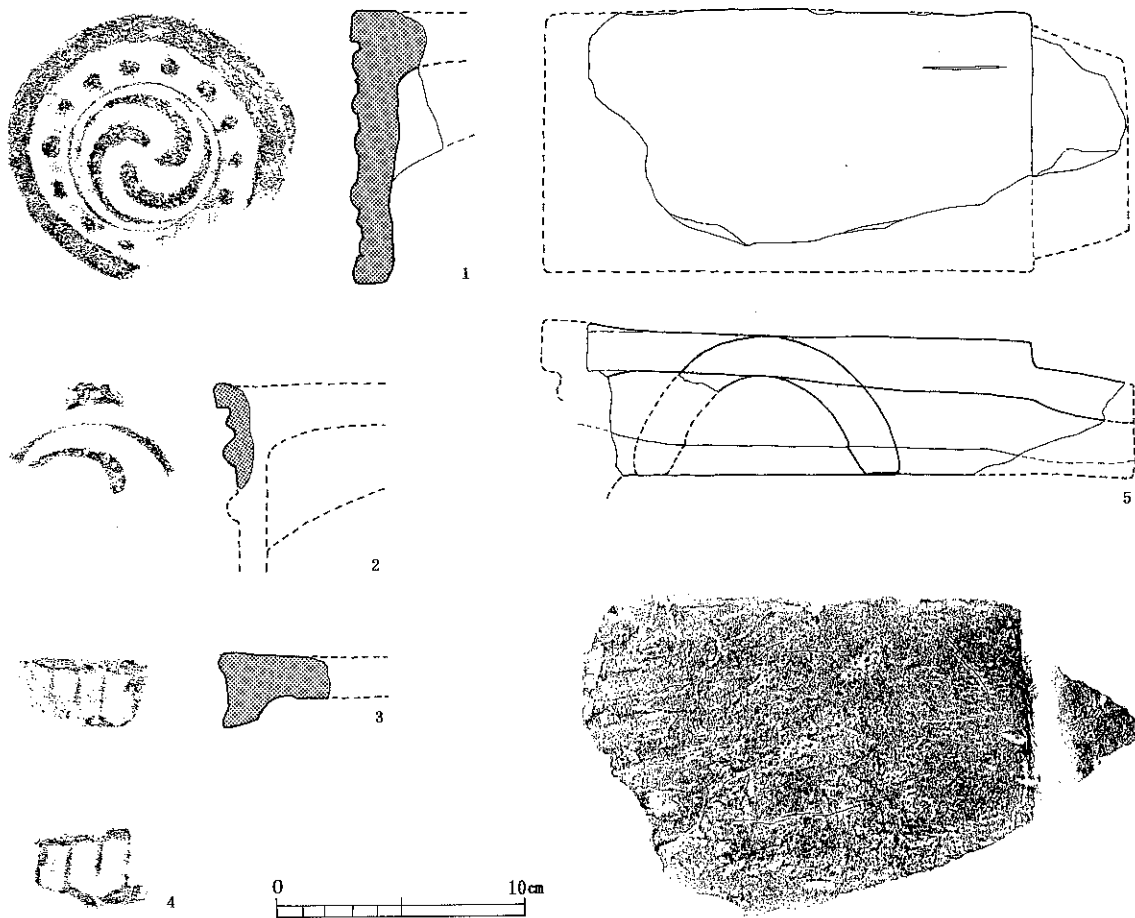
また、瓦当が剥離している丸瓦が1点出土しており、軒丸瓦全体の様相を復元することができる(第19図5)。玉縁を有し、瓦当から玉縁までの全長は約23cmの非常にコンパクトである。凸面の調整は縄叩きを行った後、指ナデにより最終仕上げを行っている。瓦当と丸瓦の接合面は無調整である。凹面には細かい布目跡を残し、吊り紐状の痕跡もみられる。側端部には若干の面とり調整をする。丸瓦の筒部には「|」のヘラ記号がある。

軒平瓦

瓦当文様はすべて剣頭文である。1型式2種類ある。いずれも残りが極めて良くないが、第19図3については比較的残りがよくこの瓦をもとにその諸特徴を述べていく。

段顎で折り曲げ技法で製作される。瓦当裏面の屈曲部を強いナデにより仕上げる。平瓦凸面には縄叩き痕がみられる。凹面には離れ砂が付着する。黒灰色を呈する。これらの一群の瓦も栗栖野産でみてよい。

軒瓦の時期については、軒平瓦の瓦当裏面の屈曲部に強いナデが施されることから、従来からいわれる「折り曲げ造り」よりも新しい型式とみなし、鎌倉前期頃とここでは想定しておきたい。¹²⁾



第19図 SD01出土瓦実測図

丸瓦

丸瓦に関しては、細片が激しいために軒丸瓦の筒部になる可能性もあり、確実に丸瓦といえるものはない。いずれの破片も軒丸瓦で説明した丸瓦の諸特徴を有する。

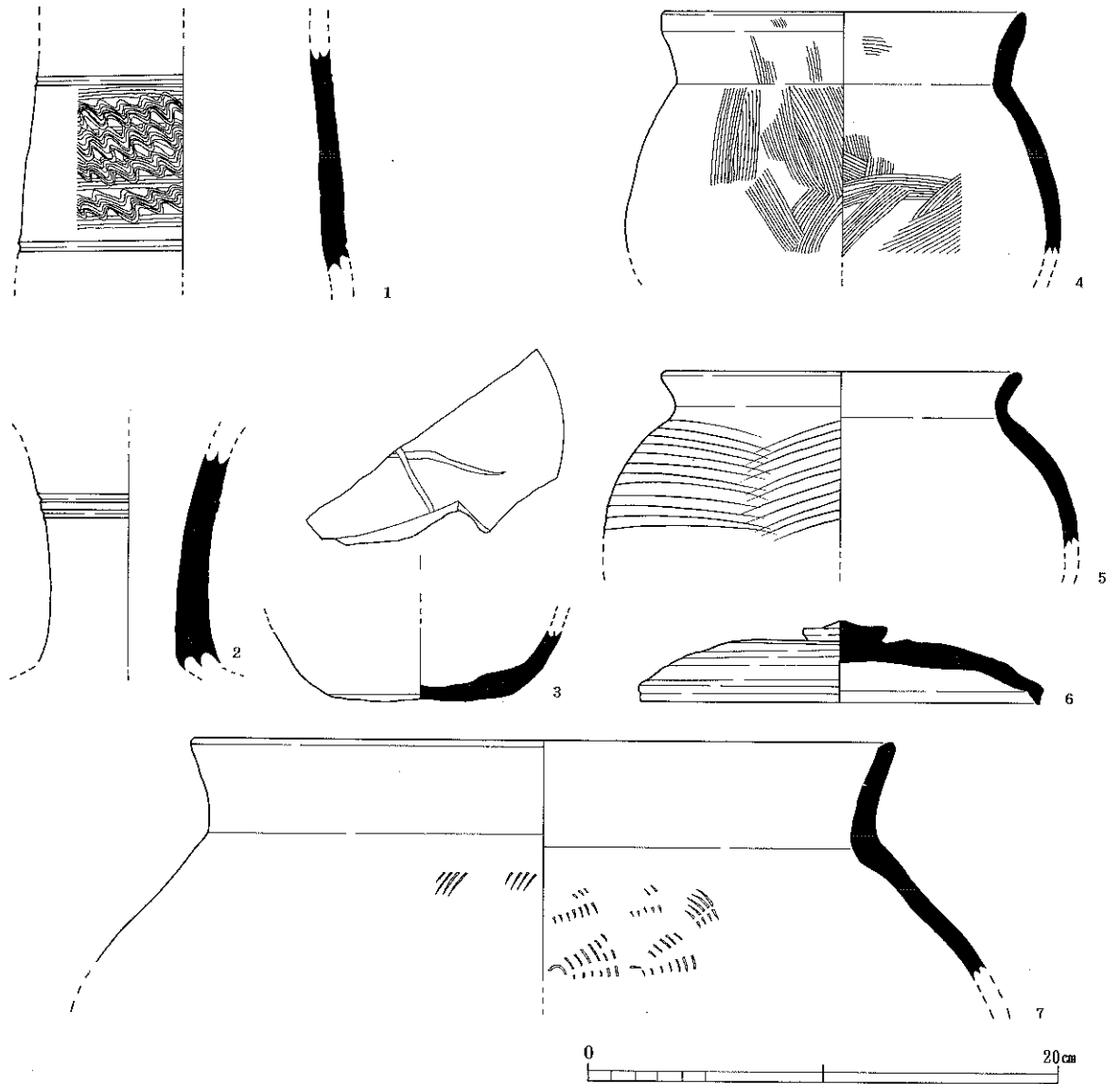
平瓦

平瓦は2タイプ(A・B)に大別される。Aは今回出土の軒瓦に対応するもので厚さ2cm弱のものである。凸面には縄叩きと離れ砂、凹面には布目跡がみられるものとみられないものが混在する。Bは厚さ3cm程の通常の大きさの平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄叩き痕がみえる。

古墳～奈良(第20図)

中世の遺構・遺物に混じって古墳～奈良時代の土器が出土したが、量的には非常に少なくまた図示できるものも少ない。比較的まとまって出土した遺構はSD05である。SD05については出土土器の大半が須恵器であったため、比較的残りは良い。

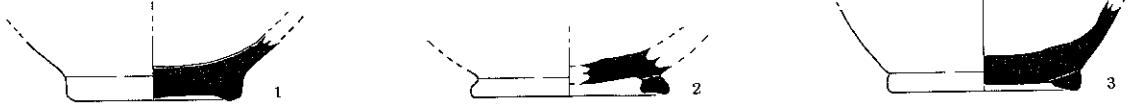
1は器台の脚部片であると考えられる。内面はナデ調整で、青灰色、硬質である。明瞭な沈線により段を画し沈線間約7cmに横ハケを施し、後に4条の波状文を密に施す。内面はナ



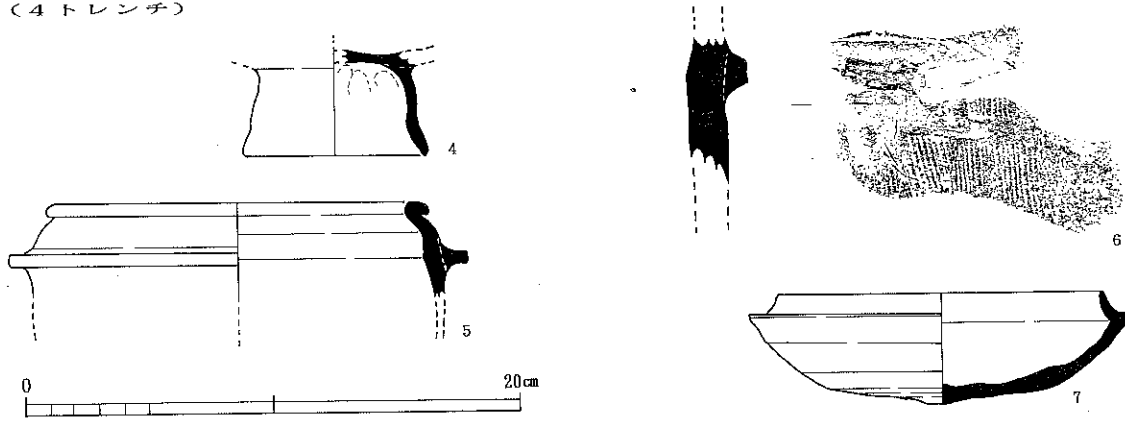
第20図 1トレンチ出土土器実測図（古墳～奈良）

デを施す。透かし穴の形態はわずかな痕跡からではあるが、三角形であると考えられる。重機掘削の際の出土である。3は杯身と考えられる。内外面ともにナデ調整である。灰白色、やや軟質である。内底面に「×」書きのヘラ記号がみられる。宇治市では滋賀谷窯¹¹⁾においてみられる。7は甕の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し、端部はわずかに内傾する端面をもつ。体部は外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕を残すが、内外面ともに後にナデにより最終仕上げを行なっている。口径約29.2cmを測る。淡青灰色、硬質である。他に甕口縁部片が1点出土している。その諸特徴は緩やかに外反する口縁部に端部はわずかに内傾する端面をもつ。体部外面は平行叩き、内面に同心円文の当て具痕を明瞭に残す。口径約22.2cmを測る。2は長頸壺の頸部とも考えられるが、頸の直径が大きいことや器壁が厚いことから明らかにしえない。

(2 トレンチ)



(4 トレンチ)



第21図 2・4トレンチ出土土器実測図

6は扁平状のつまみを有する杯蓋である。口径約17cmを測る。外面には自然釉とともに黒色固形物が付着する。灰白色、硬質である。5は土師器の甕であり、口径約14.8cmを測る。外反する口縁部に端部は面を有する。体部外面はきめ細かなミガキを施す。胎土・焼成も良好で非常に洗練された土器である。赤褐色。4は土師器の甕であり、口径約15cmを測る。外面は口縁部・体部ともにタテハケであるが、内面は口縁部がヨコハケ、体部が不定方向のハケによる調整である。外面には煤が付着する。口縁部はわずかに外反し、端部は面を有する。SK01出土の唯一の図示可能な土器である。また方形2段透かしを有する須恵器の高杯の脚部がSD01より出土している。

B. 2トレンチ (第21図)

このトレンチで出土した遺物は整理箱にして半箱であり、すべて遺構に伴って出土していない。白磁碗、灰釉陶器、須恵器・羽釜・瓦器碗（高台断面三角）、高杯片（第21図4と胎土・色調・形態同）が出土しているが、大半が細片であり図示できるものは少ない。

1は白磁碗であり、灰白色の釉を内面に施すもので、破片上では外面に釉は施されていない。底部内面は沈線で周囲に円を巡らす。底部はケズリだして成型する。高台の径は6cmを測る。2は高台のつく須恵器の杯身である。高台は、外方にやや開く。高台の径は7.8cmを測る。3は灰釉陶器の壺の底部である。底部内面にはロクロ整形の痕跡がみられる。底部外面は糸切り痕がみられる。灰白色、焼成は良い。

C. 3トレンチ

このトレンチで出土した遺物も2トレンチと同様で、整理箱半箱、すべて遺構に伴って

ない。瓦器椀・羽釜の頸部・土師皿・火舎（口縁部）、甕体部・（須恵器）・白磁（底部）の中世土器が出土しているが、いずれも細片であり、図示できるものがない。6世紀後半の須恵器の杯身も出土した。

D. 4 トレンチ（第21図4～7）

このトレンチで出土した遺物は整理箱にして1箱で、S D01から中世遺物・古墳時代の土器とS D07から古墳時代の土器が出土した。S D01の出土遺物は青磁・土師皿・高杯・瓦・火舎・瓦質土器・羽釜・足釜の中世遺物、古墳時代では甕・埴輪・須恵器（杯身・蓋）があり、S D07からは古墳時代の杯身（第21図7）が出土した。細片が多く図示できるものは少ない。また時期は不明であるがS D01から鉄製品が出土した。

4は土師質の高杯の脚部で、赤褐色、胎土はやや粗い。杯部と脚部との接合は指押さえにより仕上げる。高台径7.2cm、高台の高さは4.3cmを測る。5は土師質の羽釜で、体部はやや内湾ぎみに立上がり口縁部は外側に折り曲げ玉縁状を呈するもので口径14.4cmを測る。茶褐色、胎土はやや粗い。6は埴輪片が1点出土した。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。タガの断面は台形を呈する。淡橙色、やや軟質である。7は杯身であり、口径約17cmを測る。短く内傾する立上りを有する。6世紀後半。S D07からの出土。

E. 1 トレンチ東グリッド出土遺物（第22図）

東グリッドから出土した遺物は整理箱にして1箱である。遺物は地表下約30cm程掘り下げてみられた茶褐色土中より出土した。この茶褐色土が遺構なのか、包含層なのかは、グリッド内では確認できなかった。土師皿・羽釜・瓦器椀・火舎・輸入陶磁器の中世土器、古墳時代の杯身、甕などの種類がある。中世遺物については全体的に1トレンチより古式の様相を示し、一部に12世紀前半の土器を含む。

土師皿（第22図1～3・5）

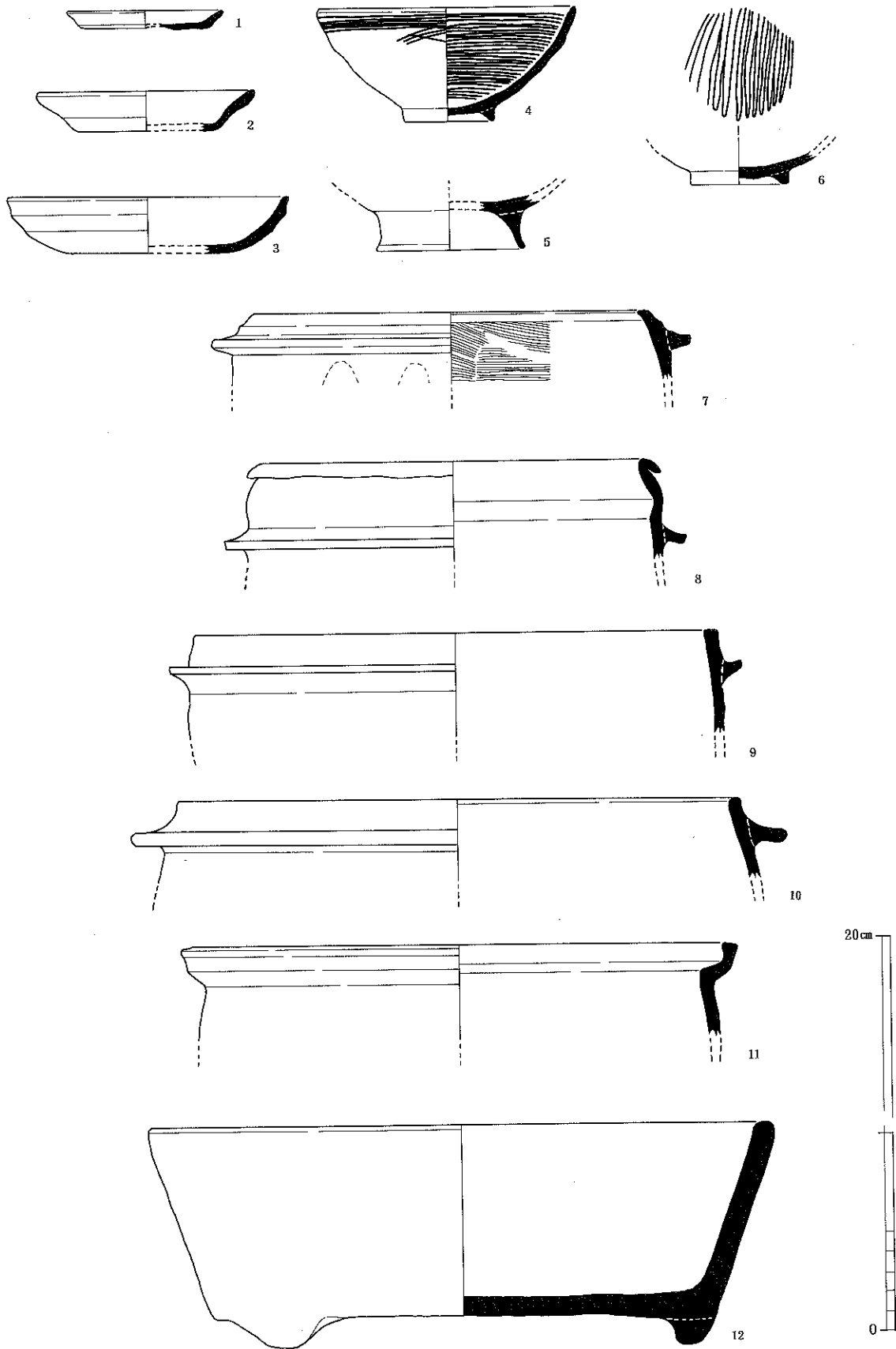
1は口縁部を横ナデして、口縁端部は丸くおさめるもので、口径8cmを測る。器高0.9cm、淡赤褐色を呈する。2は口縁部が外反するもので口径約11cmを測る。3は口縁部を二段ナデにより仕上げるもので口径約14.2cmを測る。

瓦器椀（第22図4・6）

4は口径12.8cm、器高5.7cm、高台の径は4.4cmを測るもので、内外面ともに暗文を密に施す。高台の断面は三角形であるが、高台はしっかりしている。灰白色。焼成はよくない。外面に指押さえの痕跡が一部に見える。6は椀の底部で高台の径は4.8cmを測る。底部内面にジグザグに暗文を施している。高台の断面は台形を呈している。灰白色、焼成不良。

羽釜（第22図7～10）

7は内湾する体部に口縁部はほぼ水平に面を持つ。口径は19.8cmを測る。罫は断面は台形



第22図 1トレンチ東辺グリット出土土器実測図

を呈する。罫直下に脚の剥離痕がみられることから足釜と想定される。内面にはハケ調整、罫下部には指押さえの痕跡がみられる。口縁部内外面ともに最後に横方向のナデを施し口縁部を整形する。瓦質焼成。黒灰色、焼成は良い。煤は罫の下面にまで付着する。8はやや内傾する頸部に口縁部は外側に折り曲げるもので口径19.4cmを測る。罫は断面長方形でやや下向きに取り付く。内外面ともにナデ調整。煤は罫の下面にまで付着する。乳白色、胎土はやや粗い。土師質。9はほぼ垂直に立ち上がる頸部に口縁端部はほぼ水平に面をもつもので口径は26cmを測る。罫はやや上向きに取り付く。内面は布状のものをあてて横方向のナデを施す。10は内傾する頸部に口縁端部は内傾する面をもつ。全体にわたって煤が付着し、また割れ口にも付着することから廃棄後にも火を受けていると考えられる。

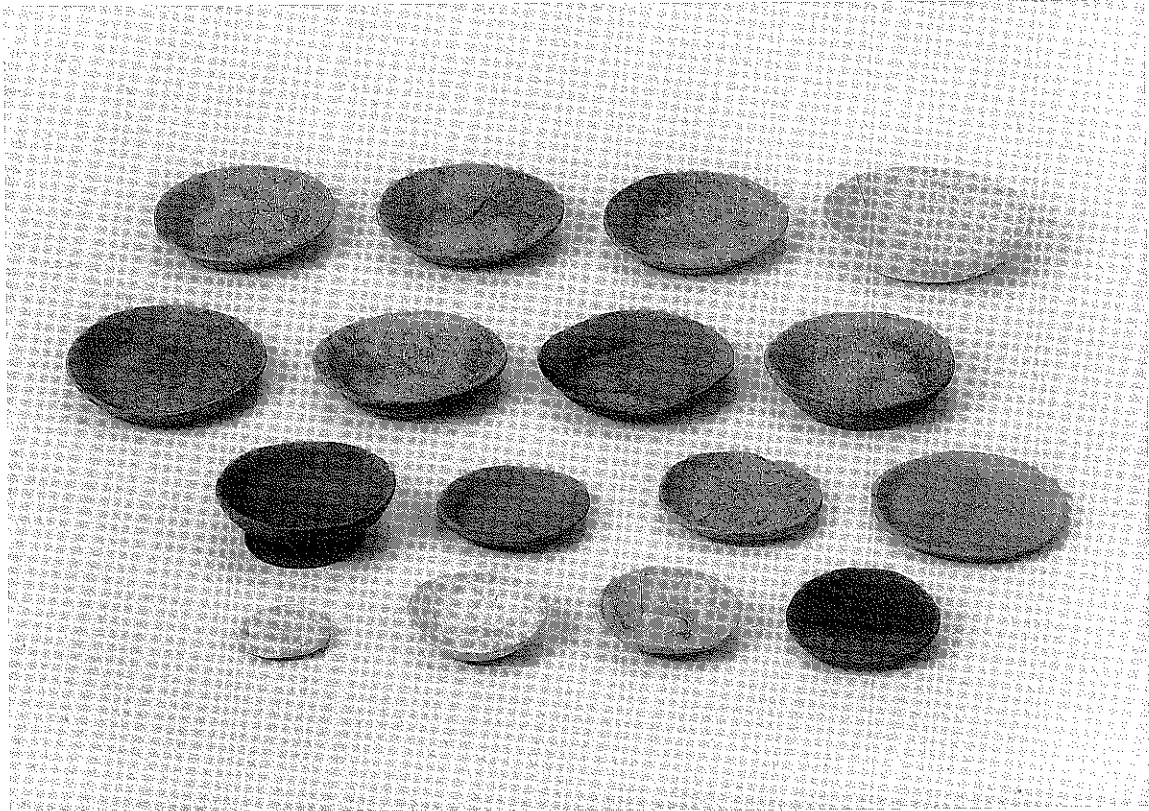
鍋（第22図11）

口縁が「く」字状を呈するもので、口径は26.6cmを測る。黒灰色で、焼成良い。瓦質焼成。内面に布状のものをあてて横方向にナデた状況が確認できる。

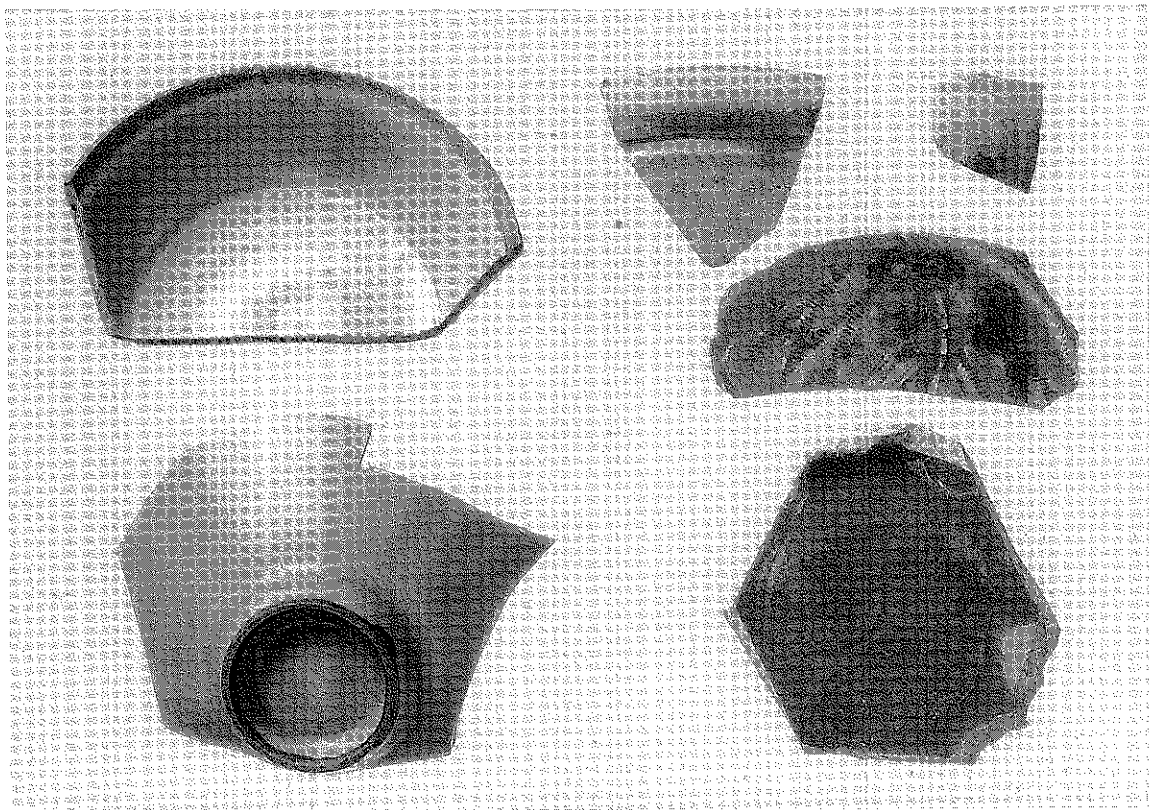
火舎（第22図12）

4分の3余りが残存しており、比較的残りが良い。口径31.1cm、器高11cmを測る。瓦質焼成。外上方に直線的に立ち上がる体部に断面台形状の脚が3つとり付く。内外面の調整はヘラ磨きを施す。灰白色で、焼成はよい。瓦質焼成。

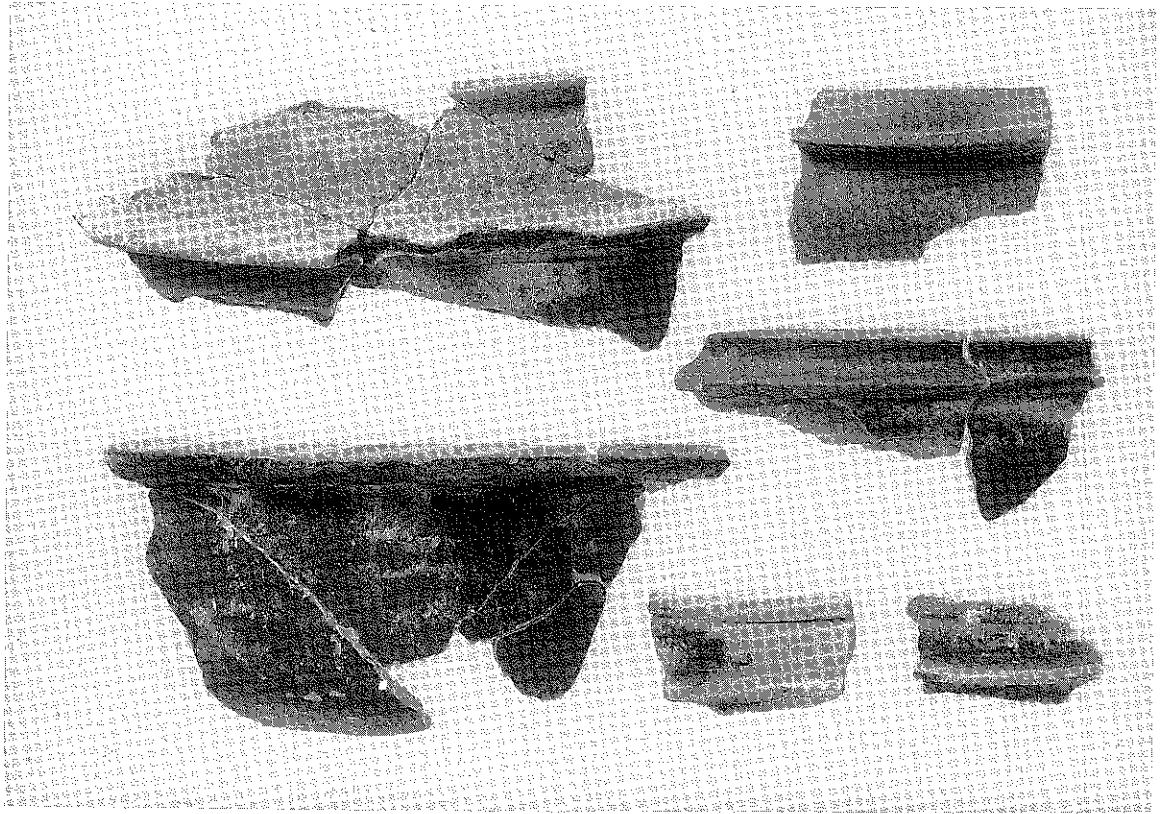
他に甌片が出土している。やや扁平な把手を貼り付け、把手中央をヘラ状工具で穿孔させている。内外面の調整はタテハケである。淡橙色、やや軟質である。また短い立上りを有する6世紀後半の杯身片も1点出土した。



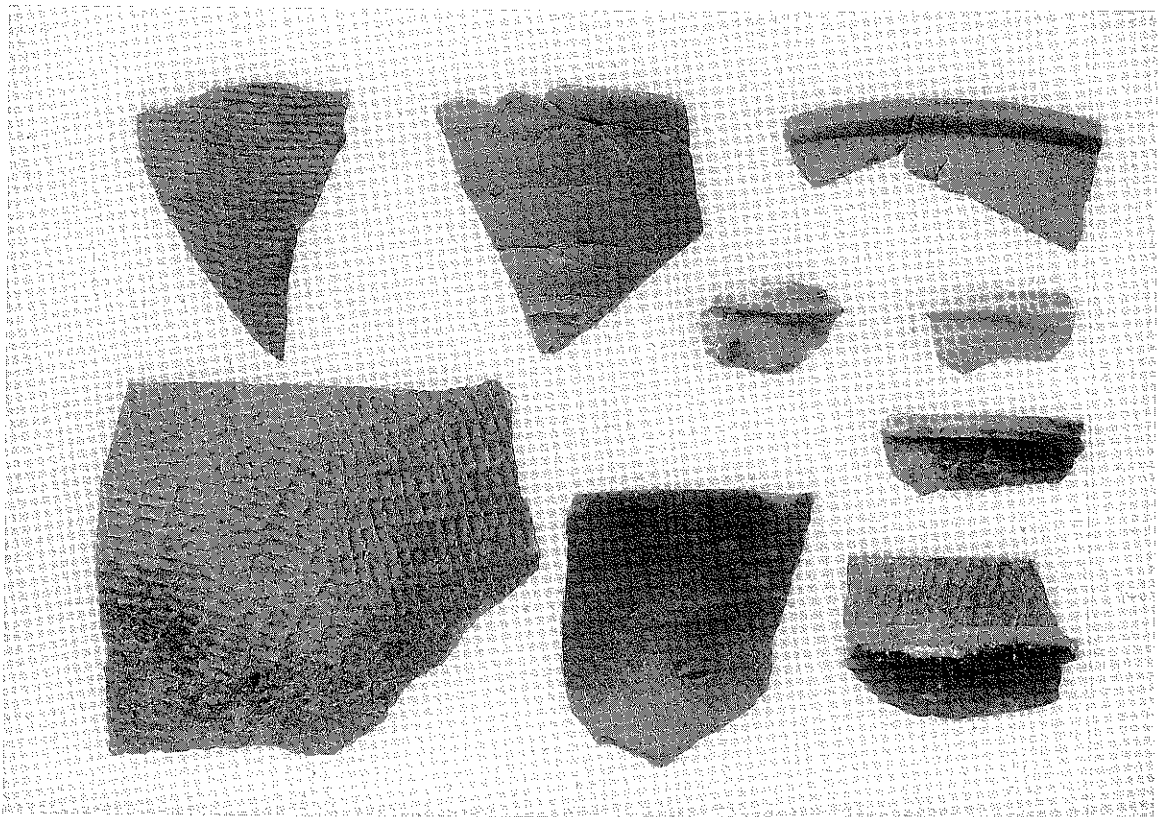
第23図 1トレンチSD01出土土師皿



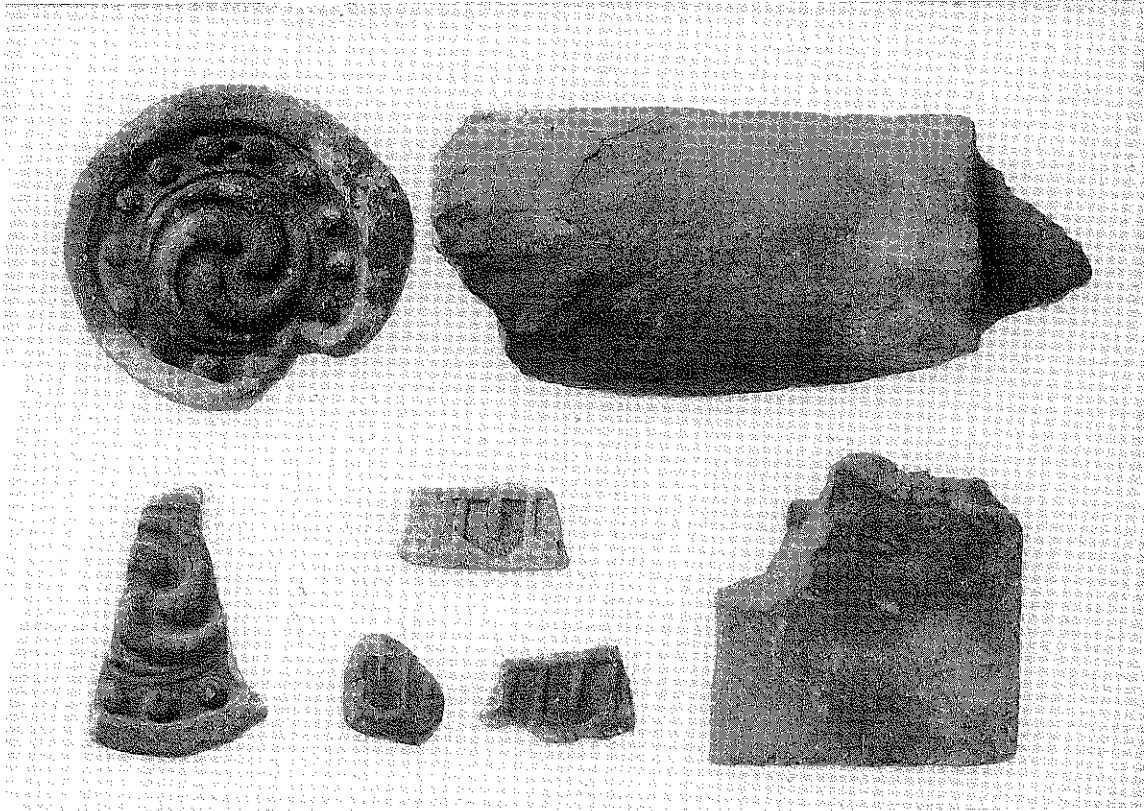
第24図 1トレンチSD01出土輸入陶磁器



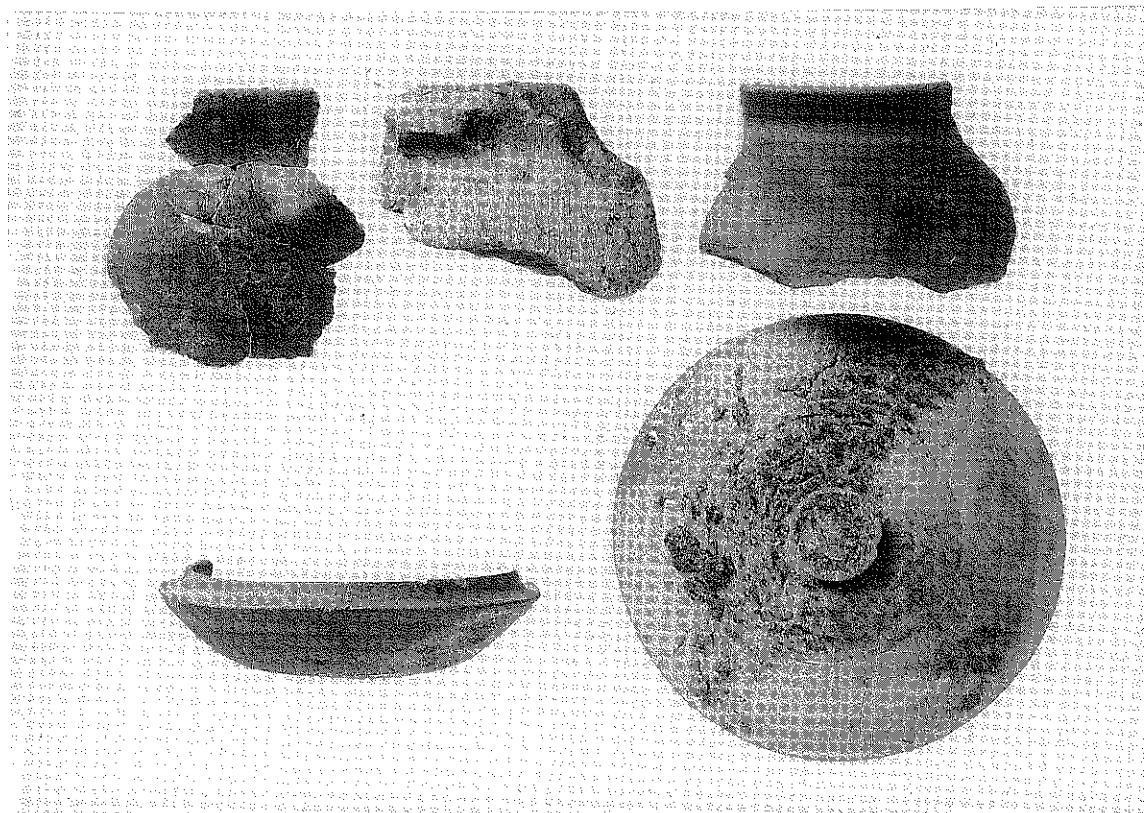
第25図 1トレンチSD01出土釜・鍋



第26図 1トレンチSD01出土土器・石製品



第27図 1トレンチS D01出土瓦



第28図 1・4トレンチ出土土器（古墳～奈良）

VI ま と め

前章までに今回の発掘調査の経過、検出した遺構ならびに出土した遺物の内容について報告をした。前述したように西浦遺跡はこれまで3回発掘調査を行い、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物を発見してきた。今回の発掘調査は、出土遺物から13～14世紀を主体とした遺跡であることが明らかになったが、遺構そのものについては大半がその性格を明確に説明できなかった。ここでは、出土した遺物を中心として今回の調査成果をまとめてみたい。

A. 古墳～奈良時代（6～8世紀）

今回の調査では、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が設定したトレンチいずれからも出土した。当該期の土器は、ローリングを受けた明確な痕跡が認められないため、遺構は顕著ではないものの、この一帯に古墳時代後期から奈良時代にかけて集落が展開していたことは想像に難くない。今回調査地南側での昨年度の発掘調査では、古墳時代後期の竪穴住居を1棟検出し、さらに遺物の出土状況等から住居が複数存在していたことが想定されており、これらを踏まえると、西浦遺跡一帯のかなり広範囲にわたって集落が展開していたと思われる。古墳時代後期、当地の歴史を語る一大モニュメントに二子塚古墳、そして木幡古墳群がある。二子塚古墳は、西浦遺跡の南約500 mにある古墳時代後期では南山城最大の前方後円墳であり、木幡古墳群は調査地の東側丘陵上に展開する群集墳では南山城屈指の古墳群である。木幡古墳群は、宮内庁陵墓地と重複しており、実態がよくわからないが、現存では120基余り確認される。かつては丘陵全体に古墳群が展開していたらしい。今回出土した器台脚部片は、この古墳群からの流入が想定され、中世土器と相伴することは、古墳群の一部が土器の年代が示す13～14世紀頃の造成等によって破壊されていることを物語っている。これら突出する古墳及び古墳群が成立した背景には、古墳時代後期の山城国における当該地が、極めて勢力を有した地域であったことは疑いない。そしてそれらを成立させた母体となる基盤的集落が周囲に存在展開していたことは間違いなく、その広がりには明らかではないものの位置的にみて西浦遺跡の集落もその範疇に含まれる蓋然性は高い。ただしその中心的集落となると、立地的にみて二子塚古墳の南に展開する寺界道遺跡一帯（微高地上）が適地であると想定される。墓域と住居域とは相関関係にあることから、集落の状況を把握することは今後の重要な課題であり、このことを明確にすることによって古墳時代後期における木幡の歴史的位置付けが可能になるであろう。

奈良時代の遺構についても現状では不明であるが、今後の調査でその具体的様相が明らかになるであろう。

B. 中世期（13～14世紀）

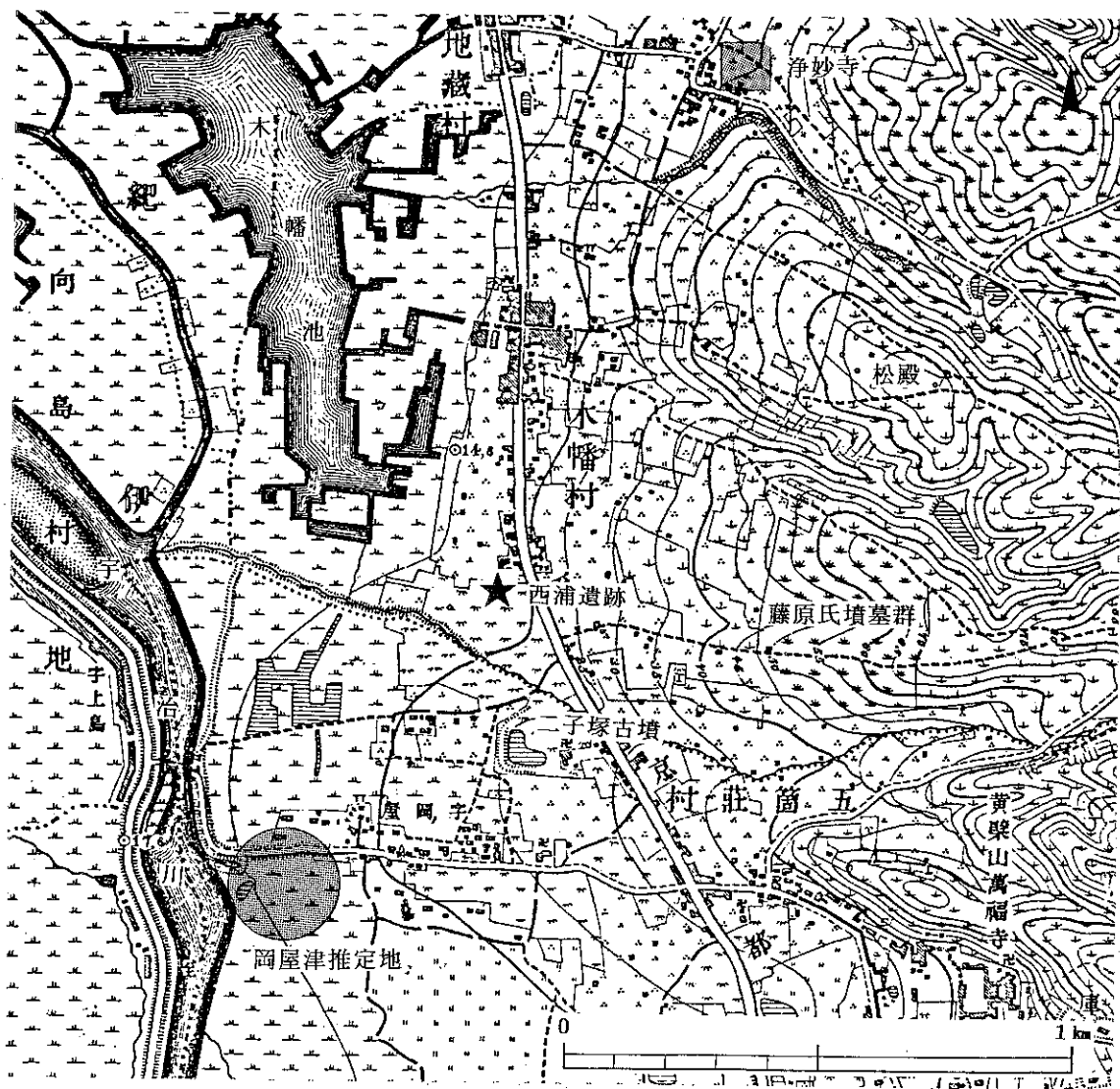
今回の調査成果の中心である。出土遺物が示す年代は、瓦が13世紀前半で、土器群は瓦器碗・土師皿・捏鉢等から概ね13世紀後半から14世紀前半を主体とし、一部に古相のものを含む。この状況から概ね13世紀から14世紀前半にかけての遺構が展開していたとして良からう。遺構が明瞭に検出できたのは1トレンチと4トレンチからである。2・3トレンチは後世大規模に削平を受けたため明らかではないが、若干ながら1・4トレンチとほぼ同時期の土器が出土していることから当該期の遺構が存在していた可能性が高い。

4トレンチで検出できた「L」字に屈曲する大溝S D06については、発掘調査時には中世に数多く散見される居館周囲を巡る堀の可能性を考えていたが、今回検出した溝S D06は大きく広がり深くなる箇所が部分的にあり、この状況はこれまで発掘調査で見つかった居館堀とは異なるようである。また溝を居館の堀と想定してその溝が囲んでいた居館跡地では、掘立柱建物や井戸といった邸宅跡を想起させる諸要素を全く確認することができなかった。今回の調査では溝がもつ情報をうまく抽出することができなかつたため、少ない情報量の中では、判断が難しく推測の域をでない。が、発掘調査で得られた情報からあえて推測してみるならば、排水的機能と同時に、溝の深くなる部位には溜池的機能要素をもった複合的機能を有する溝であったと考えておきたい。溝の存続時期は確定できないが、溝内より出土した土器から14世紀を前後する時期に存在、機能していたと考えておきたい。

1トレンチでは、中世期の遺構を数多く検出できたが、その遺構の性格を理解できるものがほとんどない。その中で、ある程度推測可能な遺構に溝S D01がある。溝S D01については前述したように、埋土中の土器群が概ね13世紀後半から14世紀前半の間におさまることから、その頃に溝は土器に代表される生活廃棄物を投棄、ごみ捨て場として利用され、溝は埋まっていった。掘削当初の溝は、一つには溝が「コ」字形に屈曲すること、さらに埋土中に比較的まとまりをもって瓦群が見られたこと等から判断すれば、溝は四方に巡り、囲まれた中に瓦を葺く建物が建っていたのではなかろうか。

まず出土した瓦群を整理していくと、確実に丸瓦といえるものがないことやわずかに存在する平瓦を除けば、すべて小型瓦である。この点から、これらの小型瓦は棟葺の屋根に使用された可能性が高いといえる。これらの瓦を葺く建物は、溝が囲む敷地面積を推定して考えると大きな建物はまず想定不可能である。したがって、絵巻物に度々散見されるような棟葺檜皮葺の小堂ないしは社が堀に囲まれ存在したと想定したい。宇治市では、伊勢田町に鎮座する式内社伊勢田神社本殿が四方を堀で区画して聖域を隔離している。社ではこれが参考となるらう。

瓦は前述したように製作技法の諸特徴から栗栖野系瓦とみて良い瓦である。宇治市では栗



第29図 明治仮製地図にみる西浦遺跡周辺の状況

栞野系瓦が纏まりをもって出土したのは今回が初めてである。宇治市では現在栗栞野系瓦が認められる遺跡には平等院・白川金色院・浄妙寺がある。いずれも藤原氏関連寺院である。栗栞野系の指標となる栗栞野瓦窯は洛北の岩倉盆地内に存在する。岩倉盆地は7世紀前半の幡枝元稻荷窯にみられるように山城国では早くから瓦生産が始まった地域の1つである。『延喜式』巻34に「栗栞野・小野両瓦屋より京中に至る、…」と記載されていることから栗栞野瓦窯は小野瓦窯とともに10世紀前半頃に平安京に供給する瓦を生産していた。これまでの発掘調査で平安期における岩倉盆地周辺の瓦生産の実態がかなり明らかになっている。今回出土した軒平瓦を観察すると折り曲げ部の屈曲部を後でナデていることや・剣頭文の刻みが浅いことといった特徴がみられ、平安後期に位置付けられる栗栞野系瓦より新相を示している。詳細な検討は今後の課題に残しつつも、これらの瓦を、概ね鎌倉前期(13世紀前半)に比定した。現在岩倉盆地において今回出土した瓦の時期に相当する瓦窯の検出はないが、

今回出土の瓦と製作技法や胎土が類似する瓦が京内でも出土していることから、今後見つかる可能性は十分にある。岩倉盆地内で平安期に続く鎌倉期の瓦生産の実態が明らかになれば、律令体制崩壊後の鎌倉前期の中央官衙系瓦屋の動向を考えていく上で非常に興味深いと思う。なおこの堂の廃絶については、溝に捨てられた土器の年代より14世紀前半頃であったと思われる。建築物はほぼ100年間に亘って存続していたといえる。

溝から比較的まとまって出土した中世土器については重要な遺物が多数含まれているにもかかわらず、その歴史的価値観を見出すことができなかつたものの、総体的に遺物をみるならばかなり平安京内における出土状況と類似したものといえそうである。個々の遺物についての検証はできなかつたが、類製塩土器とも呼ばれる土器を一例として試みる。この土器は形態や粘土輪積みの痕跡状況等が古代の製塩土器と類似しているため、その呼び名が付いたと思われるが、内面の痕跡等から判断すれば製塩土器として使用されたわけではなく、別用途として使用されたものである。この土器の出土分布状況をみると管見の限り平安京内に集中する特異な状況を示している。出土量は決して多くない。京外ではほとんどみることができない。大和国ではみられない¹⁸⁾という。こうした状況は、都での限られた人だけが使用したとみるか、もしくは地域性とみるかのいずれかであろう。瓦との関係より想定するのであれば、前者の方が有力といえようか。

最後に瓦葺きの建物が建てられた頃すなわち鎌倉前期において木幡と密接に関係をもった人物を文献資料からみてみたい。資料では、藤原基房（1145～1230）が浮かび上がってくる。藤原基房は承安二年（1172）の12世紀後半に関白に昇った人である。その後平清盛の怒りをかい失墜するも、木曾義仲と手を結び、実権を再び握った。が、木曾義仲が敗死したために、基房の実権が失われてしまったようである。晩年は木幡松殿で生活し、86歳の生涯を木幡で閉じた。現在、松殿は調査地東約800mの丘陵頂部に比定されている。現在もその名残として土塁状の高まりや井戸が残っているという。今回調査地はその推定松殿跡よりかなり離れている。今回想定した御堂が、基房に関係するか否かは、位置関係からも不明といわざるを得ないが、これまで注目視されることの少なかつた木幡に京都系物質の流入があり、そして状況的に都との繋がりが強く見出だせ得る建物群が存在していたことは、木幡の歴史的重要性を明らかにすることができたといえる。このことは平安時代から鎌倉時代にかけて平等院周辺だけが発展繁栄を遂げていると捉えられがちな現段階において、木幡地区も同様な状況があったことを物語っており、今後木幡の歴史的正当性を再検討することを行っていかねばならない。

以上、今回の発掘調査についての整理を行った。最後に、今回の発掘調査にあたってご協力いただいた方々のお礼を申し上げ、本報告のおわりとしたい。

(註)

- 1) 「五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告』 第3冊
宇治市教育委員会 1992
- 2) 「寺界道遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第10集
宇治市教育委員会 1987
- 3) 「西浦遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第20集
宇治市教育委員会 1990
- 4) 「西浦遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第21集
宇治市教育委員会
- 5) 「野神遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第32集
宇治市教育委員会 1994
- 6) 「京滋バイパス関係遺跡」『京都府遺跡調査報告書』 第7冊
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987
- 7) 土壌内の炭層中から青磁甌出土 『宇治市遺跡地図』
宇治市教育委員会 1986
- 8) 「善法古墳出土遺物調査報告」『宇治市文化財調査報告書』 第2冊
宇治市教育委員会 1991
- 9) 8) に同じ
- 10) 平成6年12月末から平成7年3月初めに実施した発掘調査で遺構に伴わず出土した。
遺構として注目されるものに府下で2例目となる埴輪窯が見つかった。
- 11) 「滋賀谷窯跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第10集
宇治市教育委員会 1987
- 12) 栗栖野瓦窯出土の瓦の実見に際して、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の中村敦氏の
御好意により実見の機会を得た。記して感謝したい。
- 13) 時実奈歩が榎原考古学研究所近江俊秀氏より御教授を賜った。記して感謝したい。

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしうらいせきはくつちょうさがいほう							
書名	西浦遺跡発掘調査概報							
副書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第30集							
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第30集							
編集者名	浜中邦弘・時実奈歩							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	〒611 京都府宇治市宇治琵琶33番地							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	東 経	北 緯	調査面積	調査期間	調査原因
にしうらいせき 西浦遺跡	宇治市木幡 西浦27-1他	26204	52	135° 47' 88"	34° 55' 24"	1,170㎡	940316) 940630	共同住宅 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 跡	主 な 遺 物		特 記 事 項		
西浦遺跡	集 落	平安~室町	溝・土壇・ 掘立柱建物	土師器・瓦・石製品 須恵器・陶磁器				

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第30集)

西 浦 遺 跡 発 掘 調 査 概 報

発行日 平成7年3月31日

発行者 宇治市教育委員会
宇治市宇治琵琶33番地

製 作 有限会社 新進堂印刷所